ガールズ&パンツァー 鉄血のオルフェンズ

砂糖多呂鵜

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

命の糧は、戦車道にある――――――

１１３氏がニコニコ動画に投稿しているＭＡＤシリーズ、【ガールズ＆ａｍｐ；パンツァー　鉄血のオルフェンズ】の支援小説、ノベライズ版になります。温かい目で見守っていただけると幸いです。

制作協力：モンターク氏（ｈｔｔｐｓ：／／ｓｙｏｓｅｔｕ．ｏｒｇ／？ｍｏｄｅ＝ｕｓｅｒ＆ａｍｐ；ｕｉｄ＝１５８３４５）

まだガル鉄をニコニコで見ていないという方は、こちらのリンクからどうぞ！

←本家第１話
ｈｔｔｐｓ：／／ｗｗｗ．ｎｉｃｏｖｉｄｅｏ．ｊｐ／ｗａｔｃｈ／ｓｍ３４２１７２１４
←シリーズはこちらから
ｈｔｔｐｓ：／／ｗｗｗ．ｎｉｃｏｖｉｄｅｏ．ｊｐ／ｓｅｒｉｅｓ／４２０９

目次

第壱話　戦車道、始めます　――　1
第弐話　戦車、乗ります！　――　34
第参話　試合、やります　――　61
第肆話　対決！聖グロリアーナです！　87
第伍話　隊長、頑張ります！　――　101
第陸話　バルバトス、行きます！　131
第漆話　友との繋がり　――　160
第捌話　大洗鉄華団、初陣です！　177

第壱話　戦車道、始めます

――――――オル、ガ……

――――――俺、達で……

――――――鉄華団、を……

◆

「……ルガ、オルガ」

「くっ……うん？」

微睡みの中から、誰かの声とともに目が醒める。

視線を上へ上げると、そこには見知った顔があった。

「――――おぉ、ミカ」

「おぉ、じゃないよ。またこんな所で寝て。……もうすぐ、試合始まるよ」

「分かってるよ……」
固い鉄床の上で寝ていたからか、所々痛む身体を動かす。ポキポキと、骨の鳴る音が小気味良い。
「ミカさーん、いましたー？」
「うん」
と、薄暗い倉庫に響くような、女性の高い声が聞こえてくる。その声を聞くと、ミカと呼ばれた少年は間延びした返事を返した。
そしてその声もまた、オルガにとって聞き慣れた声だった。
「どーしたー？みほー？」
「どーしたじゃないよ！あとちょっとで試合始まっちゃうよ！」
「分かったー……ミカ、行くぞー」
「うん」
そう言って立ち上がると、青年――――――オルガ・イツカは、自分を呼んだ少女の方へと向かっていった。
そして少年は、オルガの後に付くように歩みだして――――――一度足を止め、後ろを振り返った。

「……」

――――――――そこには、白い装甲に身を包んだ、鉄の悪魔が鎮座していた。

ガールズ＆ａｍｐ；パンツァー　鉄血のオルフェンズ

――――――――大洗学園艦。旧称、突撃艦【漁火（イサリビ）】

その学園艦の居住区の一角にあるマンションの一室で、ベッドの上で気持ち良さげな寝息を立てて、平和な寝言を呟く少女がいた。

「……やっぱり、ケーキは苺ショートだぁ……」

――――――――ピピッ！ピピッ！ピピピピピ――――――――！

「――――――――うわわっ!?」

突如鳴り響いた目覚まし時計の甲高い音で目が醒めると、ベッドから転がるように起き上がり、隣の机に置かれた目覚まし時計のアラームを止めた。
そして条件反射的に、大急ぎで布団を畳み寝間着を脱ぐ。
「……はっ！」
と、そこで今自分がいる部屋が家では無く、現在通っている学校の寄宿舎だと気付いた。
そしてすぐに、コンコン、と戸を叩く音と共に、誰かの呼ぶ声が聞こえる。
『おーいみほ、どーした？』
聞き慣れた声。――――――――十年以上共に過ごしてきた、兄の声だった。
その声と共にようやく今の自分の状況を再確認し、そしてふと、笑みが零れた。
「そっか……もう家じゃないんだ！」

◆

みほが支度を終えると、テーブルの上には目玉焼きとトーストが置かれていた。
簡易的に備え付けられたキッチンには、身長が２ｍはあろうかという男子が立ち、フライパンを洗っている。普通であれば驚くところだが、みほにとってその姿はもう見慣

れたものだった。
「ほら、簡単なもんだけど、朝飯作っといたから、座って食っててくれ」
「ごめんオルガ……でも、別に毎朝来なくてもいいのに」
「良いんだよ。早起きするのは苦じゃねえしな。それに、妹の世話見んのも、家族の仕事だ」
「……年は同じなのに」
そう言って少し頬を膨らませたみほに、彼は少しの笑みを浮かべる。
男の名前は、オルガ・イツカ。
みほと同じく、大洗学園に通う生徒であり……彼女の、義理の兄であった。
彼も後片付けを終えるとみほと同じテーブルに座り、いただきますと一言言うと、トーストにかじりついた。
その後朝食を終えると、学生鞄を持って家を後にする。一度戻って鍵を確認すると、今度こそ外に出た。
今年からこの学園艦に移ってきたが、その街並みにももう慣れたものだ。通学路にあるパン屋から漂う、焼きたてのパンの香りにいつも心くすぐられる。
ふと上を見ると、そこには空か映っていた。海と宇宙の二つを往くこの学園艦は、今は物資補給の為、補給用の低軌道ステーションに向けて進んでいる。宇宙にいる間は上

甲板が完全に閉ざされ、ああして立体映像が映し出されるのだ。
しばらくそうして歩いていると、みほが横にあったコンビニに視線を向けながら歩き出した。みほの悪い癖だ。
「おいおい、前見て歩けよ」
オルガが注意したが、もう遅い。
「うちの方には無いなぁ……サンクスふぐっ!?」
案の定前の見えていなかったみほは、電柱に立て掛けられた看板に思い切り頭をぶつけてしまった。なんとも間抜けな声と共に、ガツンという痛そうな音が響く。
「痛てて……」
「言わんこっちゃねえ……大丈夫か？みほ」
「う、うん……ありがと……」
額のあたりをさすりながら、返答する。
その後は特に何事もなく、自分達の通う学校である、大洗学園に辿り着いた。昔は女子校だったという話だが、今ではすっかり共学化しており、男子生徒の姿も当然見受けられる。
そこで校門前に、オルガとみほがよく知る人物がいた。
「よっ、ミカ」

「あ、オルガ、みほ」
「ミカさん、おはよう」
「おはよ」
　オルガ達が挨拶したのは、昔からの友人であり、オルガにとっては唯一無二の相棒と言える存在――――大洗学園一年生徒、三日月・オーガスであった。
　無表情でクールな雰囲気を纏い、制服の袖には、【風紀委員】と書かれた腕章を付けている。
「今日も風紀委員の仕事か？精が出るな」
「これが仕事だからね。オルガ達も早く教室行かないと。もうすぐＨＲ始まるよ」
「っと、そうだな。んじゃ、また後でな」
「じゃあね、ミカさん」
「うん」
　オルガ達に手を振ると、三日月は再び風紀委員の仕事に戻った。彼が所属する風紀委員は毎朝の遅刻の取り締まりや、校則に違反している生徒がいないかチェックする仕事があるのだ。
　その後教室に着いてからはこれといって変わった事もなく、授業を受けて午前の部が終わった。昼休みも、今日出来たみほの友達と、昼食を共にしたくらいだ。

　　問題は、そこからだった。

「へ～、じゃあイツカくんって、火星生まれなんだー。道理でこの日本人離れした……」

「まあな。そんでそこの孤児院で育って、みほの家に引き取られてな」

「あ～その……なんか、話題にしちゃいけない感じだった？」

「いや、気にしなくていいさ」

「火星ですか……一度行ってみたいものです。私の知らない花が咲いているかもしれません」

「地球じゃ見られないものもあるからねー」

　昼食を食べ終わったみほ達は、教室の机を囲んで談笑していた。

　オルガとみほの他にいるのは、今日友達になったクラスメイトの武部沙織と、五十鈴華だ。

　二人ともみほとオルガともすぐに打ち解け、今もこうして楽しく話していた。

「　　そうなのー？私なんか頼りない、って前の学校じゃいつも叱られてばっかりだったの。どうすれば五十鈴さんみたいになれるんだろう……？」

「華道をずっとやってたから、その所為かしら」

「へー凄い！私もずっとやってみたかったの！女らしくて華やかで良いよね～」
「みほが華道、か……いいんじゃねえの？なぁ、沙織さん」
「うんうん、イツカくんの言う通り！やっぱり女は華やかさがないとねー！」
オルガが調子良さげに聞くと、沙織も同意してうんうんと頷いた。
三人にそう言われた華は、嬉しさと気恥ずかしさが混ざったように、少し頬を赤らめた。
するとみほが身体を直し、沙織と華の方に向いた。
「二人とも友達になってくれて、ありがとう！」
みほの言葉に、二人は一瞬呆けたかと思うと、すぐに笑みを浮かべた。
「うん！」
「こちらこそ」
そうやって三人が笑いあっているのを、オルガは静かな笑みを浮かべて眺めていた。
「（……ようやく、出来たんだな。……みほの……）」
と、そんなオルガの思考を遮るかのように、教室の扉から三人の女生徒が入ってきた。
一人は片眼鏡を掛けた、ツリ目が特徴的な生徒。
もう一人は、同じくらいの身長で、スタイルの良さげな生徒。
そしてその二人に挟まれるように、一際小さな身長のツインテールの生徒がいた。何

故か、干し芋を食べながら。
「……ん？おい、誰だアイツは」
オルガが疑問の声を上げる。
すると、片眼鏡の女子が指差した方に目を向け、手を振った。
「やあ！西住ちゃん、オルガちゃん」
「へっ!?は、はい、あの……」
「……だから、誰なんだよあのちびっこい奴ら」
「……うちの生徒会長。それに副会長と広報の人」
二人の疑問に沙織が答える。
三人はみほとオルガに近付くと、見下ろす様な（ただしオルガに対しては見上げる）姿勢で話しかけた。
「……少々話がある」
「……はい？」
「……」
突如現れた三人の生徒会。
その登場に、オルガはどこか嫌な予感を感じ取っていた。

◆

三人に廊下に連れ出されたみほとオルガは、突如会長（と呼ばれた一番小さな女生徒）に告げられた。
「必修選択科目なんだけどさぁ……二人とも、戦車道取ってね。よろしく」
「へっ？」
「は？」
いきなり言われたその言葉に、二人は一瞬言葉を失った。
「あ、あの！この学校は、戦車道の授業は無かったはずじゃ……」
「今年から復活することになった」
「……生徒会長さん、だったか。俺たちはこの学校に戦車道が無いと聞いて、態々転校してきたんだ。それに、必修選択科目をどれにするかは、生徒の自由裁量に委ねられてたはずだ。それをこんな風に強請るとは……どういうつもりだ？」
「いやー、運命だねぇ。んじゃとにかくよろしくー」
オルガの言葉を煙に巻くようにそう言い残すと、三人の生徒会役員達は去っていった。廊下にポツンと、みほとオルガの二人だけが残される。
「……」

「……ホント上から目線だな、あの生徒会長さん」

目のハイライトを失い、全ての希望を見失ったかのようなみほと、先の三人の対応に苛立ちを隠せないオルガ。

義兄妹でも、その反応はそれぞれ異なっていた。

◆

結局その後は授業も身に入らず、午後の授業は保健室で過ごした。一緒に付き添ってくれた沙織と華には、感謝している。

そしてその後は、復活した戦車道に関するガイダンスが行われ、沙織と華も戦車道を受講する事にしたという。二人には戦車道を取るよう勧められたが、みほはどうしても戦車道を選ぶ気になれなかった。

戦車道。正式名称、ＭＳ戦車道。

元は乙女の嗜みと呼ばれていたが、元より使われていた戦車と、百年程前に大昔の戦争で使われた人型戦車【ＭＳ（モビルスーツ）】、そして次世代の超軽量戦車【ＭＷ（モビルワーカー）】の投入が認可されてからは、男も参加するようになった古武道の一つである。

みほの実家である西住家はその戦車道の古くから続く家元であり、当然みほも、そしてオルガも戦車道をやっていた。

だが――

「…………ッ！」

――ある出来事がフラッシュバックし、思わず身が強張る。抱きしめたぬいぐるみに込めた力が、大きくなった。

その夜、渡された必須選択科目の用紙に大きく記された【戦車道】の欄に、丸をつけることは無かった。

◆

「…………」

翌日、教室の机には選択科目の用紙が置かれ、それを囲うようにみほ、オルガ、沙織、華が座っていた。

沙織と華は戦車道を選んでおり、そしてみほは香道を、オルガは合気道を選んでいた。

「……みほ、やっぱり」
「……うん。……ごめんね。私、やっぱり……。どうしても戦車道がやりたくなくて、ここまで来たの！だから……！」
みほは二人に対して申し訳なさそうに、堪えていた思いを吐き出すかのように告げた。
折角一緒に受講しようと勧めてくれた、この学園で初めて出来た友達に嫌われてしまうかもしれない。
そんな恐怖を抱えながらも、みほはその言葉を口にした。しかし――――
「――――分かった！」
「ごめんなさいね、悩ませて」
二人は笑ってそう言うと筆記用具を取り出し、事も無げに【戦車道】の欄につけた丸印を消し、みほと同じく【香道】の欄に丸を付け直した。
「えっ!?」
「私たちもみほのと一緒にする」
「お前ら……！」
そんな反応が返ってくるとは思わず、みほとオルガは一時呆然となる。が、すぐに反対した。

「そんな！二人は戦車道を選んだんじゃ……！」
「そうだ。俺たちに合わせる必要は……」
「良いよ！だって一緒がいいじゃん！イツカくんとは別になっちゃうけど……」
「それに、私達が戦車道を選んだら、西住さんとイツカさん、思い出したく無い事を、思い出してしまうかもしれないでしょ」
　あくまでもそう言って、二人を気遣う沙織と華。
「わ、私達は平気だから！」
「いいえ。お友達に辛い思いは、させたくないです」
「私、好きになった彼氏の趣味に合わせるタイプだから大丈ー夫！」
「……お前ら。俺たちの、みほの為に……」
　ピースサインを作り笑う沙織と、優しげな笑みを浮かべる華。
　その二人の優しさが、少し辛くて、でもとても嬉しくて。
　みほは、少し顔を赤くして、笑った。
「……すまねえ。でも……サンキューな」
　オルガはそんな二人に……みほに出来た居場所（友達）に、礼を述べた。

◆

午前の授業が終わり、昼休みの時間になった。
選択科目の用紙は提出し終え、今は四人で食堂に向かっている。
「ん……？よぉ、ミカ！」
「あれ、オルガ。それにみほも」
「あ、ミカさん」
その道中、オルガ達は三日月とばったり出会した。
同じく食堂に向かうつもりだったのか、手には財布が握られている。
三日月はオルガと、そしてみほに手を振ると、次に隣にいた沙織と華を訝しげに見詰めた。
「その二人、誰？」
「うちのクラスメイトだ。……二人にも紹介しとく。こいつは三日月・オーガス。俺の昔からの親友で、相棒だ。仲良くしてやってくれ」
「あ、うん。私、武部沙織。よろしく！」
「五十鈴華です。よろしくお願いします」
「ん。えーっと……一年の三日月・オーガス。よろしく」
自己紹介を済ませると、三日月は手を差し出す。二人はその意図を理解すると、順に

三日月と握手を交わした。それが終わると満足したように、三日月は制服のポケットから好物である火星ヤシを取り出し口にした。
オルガはその様子を見ると、何かを思いついたような表情になり、提案した。
「そうだ折角だ。今日は五人で昼食うか。ミカ、大丈夫か？」
「うん。俺は大丈夫」
他の三人も「いいよ！」と言ったので、今日はそのまま五人で食堂に向かう事となった。

◆

食堂の席は幸い空いていたので、五人で向かい合うように座った。この時間はいつも混んでいるので、席を取れたのは僥倖である。
オルガはカツ丼定食、ミカはミートソースパスタのセットなど、それぞれ好きなものを頼み、取っておいた席に座った。
「んじゃ、いただきます、と」
「「「いただきます」」」
人が多い食堂だと、色々と会話も聞こえてくる。特に今日聞こえるのは、必修選択科

目についてだった。

「　　ねえねえ。選択科目、どーした？」
「迷ったんだけどー、私戦車にしちゃったー」
「うっそ私もー！」
「どーなんだろーねー、戦車！」

「今日も飯がうめーッ！」
「シノさん、お行儀悪いですよ」
「ん？ああ悪い悪い！で、お前ら選択科目どーしたよ！俺戦車選んだぜ！」
「俺は自動車部あるから整備担当だけど、一応戦車道選んだよ」
「あ、俺も戦車道です！でも俺も自動車部なんで、整備とか裏方ですかね」

「戦車道って、昔は乙女の嗜みって言われてたんだってー」
「今じゃ男子もやってるけどねー」
「でもでも、男子が乗るのって戦車じゃなくて、あの三つ足の戦車と、それからモビルスーツでしょ？」

「だよねー。やっぱ男子と普通の戦車ってミスマッチなのかなー」

「……」

「タカキとヤマギは知ってたけど、やっぱシノも戦車にしたんだ……ん？どうしたの、オルガ」

「……いや、何でもねえ」

ここの話に耳を向けると、いやでも戦車道のことが頭にチラついてしまう。

聞こえてくる話に意識を向けないよう、丼を持ち上げてかき込んだその時。

「　　早く大砲っぽいやつ撃ってみたーい」

「ちゅどーんっ!!」

「ッ!!ゲホッ、ゴホッ……」

「っ、オルガ大丈夫？はい、水」

「あ、ああ……悪いな」

後ろから聞こえてきた声に、思わずむせてしまった。三日月が差し出してくれた水を飲んで、ひとまず落ち着く。

隣を見ると、動揺していたのはみほも同じだったようで、箸を動かしていた手が止まっていた。
「……あっ。帰り、さつまいもアイス食べてく？」
「大洗は、さつまいもが名産なんですよ」
「そうなのか？」
そんな二人の様子を気遣ってか、沙織と華が話題を持ち出す。
「あ、知ってる。干し芋とか有名だよね」
「うん、一部では乾燥芋って言うらしいよ」
「そーなんだー」
「いいね、みんなで行こう。……火星ヤシのアイスとか、あるのかな？」
「いや、流石に無えだろ。少なくとも地球じゃ」
五人で話すと、何とか周囲の話に意識を向けずに済んだ。
心の中でホッと一息付き、再び昼飯にありつこうとした、その時。

『普通一科、二年Ａ組西住みほ、並びにオルガ・イツカ。至急生徒会室に来ること。繰り返す。普通一科、二年Ａ組西住みほ、並びにオルガ・イツカ。至急生徒会室に来ること。以上』

あの片眼鏡の生徒会員の声が、スピーカー越しに聞こえてくる。
その声を聞くと、みほの顔に薄っすらと冷や汗が浮かび、身体が震え出してきた。
「……ど、どうしよう……!?」
「大丈夫、私達も一緒に行くから！」
「落ち着いてくださいね」
怯えるみほを落ち着けようと、沙織と華がみほの手を握る。
その様子を不思議に思った三日月が、オルガに尋ねる。
「……三人とも、どうしたの？それにオルガ、広報の人に呼び出されてたけど」
「……まあ、色々あってな。ミカは――――――」
「俺も付いてく」
待っていてくれと言う間も無く、三日月が言い紡いだ。
「みほのこともだけど、オルガの身に何かあったら心配だし」
「何もねえよ。……まあでも、サンキューな」
三日月の心遣いに感謝すると、オルガは残っていたカツ丼を一気にかき込み、水で流し込んだ。
口元を拭き、立ち上がる。

「さて……行くか」

◆

「これは一体どういうことだ？」
「なんで選択しないかなぁ……？」
「我が校、他に戦車経験者は皆無です」
「終了です……我が校は終了です！」
生徒会室に入るなり、あの片眼鏡の広報が、みほとオルガの選択用紙を取り出し、問い詰めた。
二人の選択用紙にはそれぞれ、香道と合気道の欄に丸が付けられている。一番上に一際大きく設けられた戦車道の欄には、当然ながら丸は付けられていない。
「勝手な事言わないでよ！」
「そうです！やりたく無いと言っているのに、無理にやらせる気なのですか？」
沙織と華がみほ達を庇うように、抗議の声をあげる。
そしてオルガは前に出ると、毅然とした態度で言い放った。
「生徒会長さん、あんたの要求は呑めない。一方的に命令して、やりたくもねえ事をやら

せようなんざ……そんな筋の通らねえ話、俺達が受ける道理は無えな」
　まるで狼のような鋭い視線で、生徒会長を睨みつける。
　しかし眼前の小さな生徒会長は、そんな視線を意に解することもなく、その高圧的な態度を隠さずに言った。
「そんなこと言ってるとあんた達……この学校にいられなくしちゃうよ?」
「……脅す気か?それが、生徒会のやり方って奴なのか?」
「……脅すなんて卑怯です」
「脅しじゃない。会長はいつだって本気だ」
「そーそー」
「今のうちに謝った方が良いと思うわよ?ね?」
　三人がオルガ達にあくまでも言い詰める。
　一方の三日月は口を挟むことはなく、ただし視線は彼らに向けたまま立っていた。ポケットから再び、火星ヤシを取り出して摘む。
「そのつもりはねぇ。そんなチンケな横暴に屈するほど、俺たちはヤワじゃねえ」
「横暴は生徒会に与えられた特権だ」
　互いに一歩も引くことなく、話し合いは激化する。
　その渦中にいるみほは、胸を締め付けられるような感覚を覚えた。

「（武部さんと五十鈴さん、本当は戦車道やりたいのに……。それに、オルガだって……）」

生徒会にあくまでも毅然とした態度で反論する、オルガの背中を見る。

いつも自分は、誰かに庇ってばっかりだ。

自分からは何も出来ずに、結局足を引っ張ってしまう。

そのどうしようもない自己嫌悪感に、心が押し潰されそうになる。

思わず顔を俯け、目を閉ざす。

そうして自己嫌悪から逃げようとしても、寧ろそれは一層強まるばかりだった。

「（私の、為に……）」

その時。

先程まで沈黙を決めていた三日月が、口を開いた。

「これは……みほが決める事だよ」

「っ……！」

その言葉を聞き、思わず三日月の方を見る。
三日月はみほを真剣な眼差しで見据えて、続ける。
「これはきっと、みほの、これからの全部を決めるような決断だ。だからこれはオルガや、みほの仲間に頼っちゃいけない。みほが自分で決めて、自分の口で言わなきゃいけないんだ」
「……！」
その言葉を聞き、みほの中に一つの決心が生まれた。
それは今、オルガ達に庇われている事だけじゃない。
きっと今ここでみほが決心しなければ、これから先ずっと、何か大事な決断を、他人に押し付けるのみになってしまうだろう。
根拠は無い。でも今のみほには、そう思えた。強い確信があった。
だからこそみほは、言う。
ほんの少しの迷いを振り切って、後ろではなく前を見て。
「あの、私！」
『!?』
みほの声に、全員の視線が集まる。
それでもみほは臆せずに、言い切った。

「戦車道、やりますっ!!」

『えええーーっ!!』

「え……っ？」

「よかったぁぁ～……！」

「にひっ」

「ふっ……」

生徒会とオルガ達。

その反応はそれぞれだった。

結局その日はそこで終わりになり、オルガの件については保留となった。

◆

その日の夜。

「……オルガ」

「ミカ……眠れねえのか？」

「オルガこそ。こんな時間に外に出て」
「そうだな……昼の事、考えちまって」
　男子寮の屋上にいたオルガに、ミカが声を掛けた。
　並んで鉄柵の前に立ち、夜空を眺める。
「……あいつが、あそこまで言うなんてな」
「うん。でもあれは、みほが言わなきゃ駄目だと思ったから」
「……やっぱ、ミカか」
「うん。……悪いこと、したかな」
「いや、そうじゃねえ。でも……そうだな」
　夜空を眺めながら、オルガは一年前の記憶を思い出す。

『（イツカ……）』

「……」
　かつて自分を慕ってくれていた仲間を置き去りにして、自分は大洗に来た。
　二度とあんな思いをしたくない。その一心で、三日月を頼りにわざわざここまでやって来た。

でもそれは、ただの――――

「……いつまでも、後ろ向いてるわけにいかねぇ。……逃げんのは、もう終わりだ」

「オルガ？」

「いや、何でもねえ。……なぁミカ。やってもらいてえ事がある」

「……うん、分かってる。俺の学年の仲間に、声掛けとくから、オルガも他の奴に伝えといて」

三日月はオルガの意図を察して、そう言う。

「やっとみほの居場所が出来たんだ。……守ってやらねえとな」

「そうだね」

「……変わらねえな、お前は。孤児院にいたときから、ミカはミカのままだ」

「……オルガは？」

「俺か？」

互いに顔を合わせて、三日月の掌に拳を突き出す。

その時の表情は、自分が西住家に引き取られる前――――三日月やその仲間と共

にいた、孤児院にいた時の、少年の顔にそっくりだった。
「　　俺は俺だ！」
「だね　　」

◆

翌日。オルガは学校に着いて早々、生徒会室へと赴いた。
「……何の用？」
「生徒会長。……あんたの話に乗ることにした」
「っ、という事は、つまり！」
副会長の人が、目を輝かせたように期待の眼差しを向ける。
オルガは生徒会長を見据えると、堂々と言い放った。
「戦車道……やるよ!!」
「……おっけ」
「やった！」

「……計算通りだな」
生徒会の三人が、それぞれ喜ぶ。
オルガは不敵な笑みを浮かべると、もう一度前を見上げた。
自分の進むべき道を、見出したかのように。

◆

それから数時間後。
ついに、戦車道の授業が始まる時がきた。全員に校庭に出て、奥に建っている倉庫の前へと集まっている。
「ん?よぉ、オルガじゃねえか!お前も戦車道取ったのか!」
「おおシノ。まあな」
授業の開始前。
真っ先にオルガに声をかけたのは、オルガ達と同学年の生徒であり、昔馴染みの仲間、ノルバ・シノだった。そして続くように、隣から声をかけられる。
「俺もいるぜ!それに、こいつもな!」
「久しぶりだな、オルガ」

「ユージン!・それに昭弘!」
　次いで来たのは同じく二年のユージン・セブンスタークと、昭弘・アルトランドだった。彼らもまたオルガの少年時代の仲間であり、同じ孤児院で育ったもう一つの家族である。無論、ここに入学してから話したり会ったりもしているのだが、クラスが違うということもあり、以前ほど話す機会が無かったのだ。
「昭弘、最近どうだって?・弟達の様子は」
「ぼちぼちだな。アストンの方も、元気にやってるってよ」
「そういや、あいつは知波単にいるんだったか」
　仲間同士でいると、話す話題も沢山ある。
　そうしてしばらく話していると、前に生徒会の面々が出てきた。
「これより、戦車道の授業を開始する」
　片眼鏡の広報――――――河嶋桃が開始の合図をする。
　すると、後ろにいた天然パーマの女生徒が声を出した。
「あ、あの!・戦車は?・ティーガーですか?・それとも……」
「えーっと、なんだったっけな」
　生徒会に案内され、倉庫の内部へと入る面々。
　倉庫の中は薄暗く、様々な部品が転がっている。その最奥に、既に使われなくなった

サビだらけの戦車と、モビルワーカーが置かれていた。
「……なにこれぇ」
「ボロボロー」
「ありえな～い……」
「侘び寂びでよろしいんじゃ……」
「これはただの鉄錆」
次々と不満の声が出る。
他の面々もリアクションは似たり寄ったりで、目の前の戦車とモビルワーカーに、あまり好印象は抱いていないようだった。
そんな面々とは裏腹に、みほとオルガは前に出ると、戦車とモビルワーカーに触れ、そして全体を見た。
確かに年季は入っているが――――
「――――装甲も転輪も大丈夫そう。……これで行けるかも」
「ちと古い機体だが、ちゃんと修復すりゃ、十分使えるな。……へっ、何だよ。良いのがあんじゃねえか」
戦車とモビルワーカーのコンディションを確認し、笑みを浮かべる。

――――――ここから、始まるのだ。

そんな希望を抱いた少年少女達を乗せた学園艦(箱舟)は、広い宇宙(そら)を進んでいた。

第弐話　戦車、乗ります！

遂に始まった、戦車道の授業。
しかしそんな彼らの前に、早くも大きな課題が降りかかった。
最早言わずもがなだろう。決定的な、戦車の不足である。
「こんなボロボロでなんとかなるの？」
「多分……」
「『男と戦車』は新しいほうがいいと思うよ？」
「それを言うなら、『女房と畳』では……？」
「同じようなもんよ。それにさ、あの三つ足のやつ含めても、二両しか無いじゃん？」
「えっと、この人数だったら……」
沙織の指摘に、生徒会副会長、小山柚子が全員に必要な戦車数を数える。
すると小山が答えるより前に、河嶋が答えた。
「モビルワーカー含めて、全部で九両必要です」
「じゃあみんなで、戦車探そっか！」
河嶋に続くように出た会長、角谷杏の言葉に、一同が騒然となる。

「探すって?」「どういう事ですか?」
「我が校に於いては、何年も前に戦車道は廃止になっている。だが、当時使用していた戦車が何処かにあるはずだ。いや、必ずある。明後日、戦車道の教官がお見えになるので、それまでに残り七両を見つけ出すこと」
「して、一体どこに?」
後ろにいた赤いマフラーが特徴的な女生徒から、当然の質問が飛び出る。
「いやー、それが分かんないから探すのよ」
だが会長は両手を開くと、あっけらかんとそう言ってのけた。
「何にも手かがりないんですか?」
「ない」
「マジかよ……」
「では、捜索開始!」
河嶋の言葉をきっかけに、全員が解散し戦車を探しに出向く。
やる気無さげなものや、宝探し気分でいそうなものまで、反応はまちまちだった。
「聞いてたのと何か話が違うー……。戦車道やってるとモテるんじゃ……」
「明後日カッコいい教官来るから」
「ホントですか?」

「ホントホント。紹介するから」
「行ってきまーっす！」
会長の言葉に乗せられ、やる気なさげに残っていた沙織も倉庫を後にする。
オルガ達もその様子を見やってから、歩み始めた。
「ま、どの道戦車がなきゃ話にならねえ。探さなきゃいけねえんだ」
「そうだね。俺たちも行こうか」
「ああ。行くぞ、みほ」
「うん」
オルガが声をかけると、残っていた面々も次々と戦車を探しに出て行った。

◆

「とは言ったものの……どこにあるって言うのよーーーっ！」
「マジで何も手がかりがねぇんだもんなぁ……」
探し始めてしばらく。早くも捜索が行き詰まりかけていた。先程までやる気に満ち満ちていた沙織が脱力している事からも、それが伺えるだろう。
何しろ会長が言っていた通り、本当に何の手がかりもないのだ。付近を捜索しても見

つからず、あてずっぽうに駐車場までやってきたのだが。
「駐車場に戦車は置いてないかと……」
「だって一応は車じゃない……」
「まぁ間違っちゃいねえが……こんな所にはねえだろ」
一応付近を見渡すが、当然戦車どころか、モビルワーカーすら一台も置いていない。あるのは普通の車だけだ。
「じゃ、裏の山林行ってみよ! 何とかを隠すには林の中って言うしね!」
「それは森です……」
「うん。木を隠すなら森の中、だよ」
沙織に続くように、三日月と華が付いていく。
みほとオルガもここいらには見切りを付け、彼女らに着いて行く……その前に。
「……」
「じー……」
先程から木陰でこちらを見つめる人影に、そろそろ声をかけるべきだろうか。さっきからずっとこちらを見るばかりで、中に入って行こうとはしていない。
もしかしたら、一緒に探したいけど参加しづらいのかもしれない。そう考えたみほは、後ろに振り返って話しかけた。

「あ、あの！」
「はいっ!?」
「良かったら、一緒に探さない？」
「いっ、いいんですかっ!?あ、あのぉ……普通二科、二年C組の、秋山優花里といいます……。えっと……不束者ですが、よろしくお願いします！」
少しおどおどしながら秋山優花里と名乗ったその女生徒は、記憶に間違いがなければ先程生徒会に戦車の種類について質問をしていた子だ。
三日月達も戻ってきて、挨拶を返す。
「おう、よろしく頼むぜ」
「こちらこそお願いします。五十鈴華です」
「武部沙織！」
「三日月・オーガス。よろしく」
三人が順に自己紹介をする。
オルガ達も自己紹介をしようと、名乗ろうと――
「あ、私は……」「俺は……」
「存じ上げてます！西住みほ殿と、オルガ・イツカ殿ですよね!?」
「……は、はい」

――――――するより前に、優花里が名前を知っていたようだ。
先に言われた事に驚いてしまい、オルガも思わず敬語になってしまう。
「では、よろしくお願いします!」
何となく、子犬っぽい印象を受けるその子。秋山優花里は、挙手の敬礼をして、皆の仲間に加わった。

◆

秋山優花里を仲間に加えて、オルガ達は学校の裏手にある山林に来ていた。ちなみに三日月は優花里が加わった後、『分かれたほうが効率が良い』と言って、一人別の方向に向かっていった。大丈夫かと聞いたが、どうやら学校とその周辺のマップはある程度頭に入っているらしい。心配はないだろう。
地図を頼りにしばらく林の中を歩いていると、華が立ち止まり、鼻をスンスンと嗅いだ。
「どうしたの?」
「あっちから匂いが……花の香りに混じって、ほんのりと鉄と油の匂いがします」
その匂いを辿るように、華が嗅覚を頼りに前へと歩き出す。

「華道やってるとそんなに敏感になるの!?」
「凄えな、華さんは」
「私だけかもしれませんけど……」
華に続くように、オルガが進み出す。
その後ろで優花里はきゅっと拳を握ると、力強く言い放った。
「では……パンツァー・フォー!!」
「ぱんつのあほー!?」
直後に聞こえた沙織の盛大な空耳に、全員が思わず溜息をつく。
「パンツァー・フォー……戦車前進、って意味なの」
……なんとも気の抜ける感じではあったが。
そこからしばらく華の嗅覚を頼りに歩いていると、林の影に鈍色に光る影を見つけた。
「あれって……もしかして!」
沙織が近くに行って確認すると、それはまごう事無く戦車だった。かなり錆び付いているものの、まだ使えそうな戦車だ。
「やった!あったー!」
「おお、探せばあるもんだな」

オルガが感心したように言うと、ポケットに入れていた携帯から着信音が鳴った。
三日月からだ。何かしら探索で進展があった場合に、連絡するよう言い含めていたのである。携帯を取り出し、繋ぐ。
「ミカ、そっちはどうだ?なんか見つかったか?」
『うん。白いモビルワーカーが一機。そっちは?』
「奇遇だな。こっちも一つ見つけたぜ」

◆

「――――――ご苦労。運搬は自動車部に依頼しておくので、引き続き捜索を続行せよ」
河嶋は電話を切ると、後ろで座りながら干し芋を食べている、会長に報告した。
「戦車とモビルワーカー、一両ずつ見つかったそうです」
「やればできるもんだねぇ……はむっ」
報告を聞いた会長は感心したように言うと、手にした干し芋をまた口に運んだ。

◆

「ミカ、どうしたんだ?こんなとこまで呼び出して」
その後も探索を続けていたオルガ達だったが、その途中、三日月から『見てもらいたいものがある』という連絡を受け、今は学園艦の底までやって来ていた。その道中は穏やかではなく、横道には有刺鉄線のバリケードまで張ってあった。
メールに送付されていたルートを頼りに向かうと、ある鉄扉の前に三日月は立っていた。扉はすでに開けられており、中からはほんのりと光が差し込んでいる。
「うん。学園艦の構造で気になるところがあったから、そこを調べてたんだけど……」
「ここか?」
「そうだね。それで、さっき明かりをつけて調べてたら、アレを見つけて」
「アレ?」
三日月が扉の中に入り、真正面を指差す。
オルガも続くように入り、三日月が指差した方を向いた。
「なっ――――――これは……!?」
そして、目の前に鎮座していたアレを見た瞬間、オルガは戸惑いの声を隠しきることができなかった。
そこにあったのは――――――

◆

その翌日。

集合した一同の前には、各々が発見した戦車、そしてモビルワーカーが揃い踏みしていた。

「結局、見つかったモビルワーカーは全部同じタイプか」

「ああ。色が違うのもあるが、全部【ＴＫ―５３】だな。結構古いやつだが……まあ使えるだけマシか」

「でもよぉ、戦車の方はバリエーション豊かだぜ？」

同じタイプのみだったモビルワーカーと違い、戦車の方は全部が全く違う戦車だった。

軽戦車や中戦車、突撃砲など……素人目に見てもそれらに統一性がないことは明らかで、如何にも『寄せ集めた感』が滲み出ていた。その通りなのだが。寧ろ、モビルワーカーだけでも全て同じタイプだった事が奇跡に近いだろう。

左から、【８９式中戦車甲型】【３８（ｔ）軽戦車】【Ｍ３中戦車リー】【Ⅲ号突撃砲Ｆ型】【Ⅳ号中戦車Ｄ型】だ。物の見事にバラバラである。

「どう振り分けますか？」

「見つけたもんが見つけた戦車に乗ればいいんじゃない？」
「そんな事でいいんですか？」
「３８（ｔ）は我々が。お前達はⅣ号だ」
「え？あ、はい」
前で話し合っていた生徒会が、みほに命令する。
みほは訝しみながらも、特に迷うことなく返事した。
最終的に、Ⅳ号はみほ率いるＡチームが乗ることになり、他の振り分けは８９式が元バレー部のＢチーム、Ⅲ突が将軍や武将のようなコスプレをした、所謂歴女で構成されたＣチーム、Ｍ３は一年のみで構成されたＤチーム、３８（ｔ）は生徒会のＥチームが乗ることになった。
そしてモビルワーカーの方は、オルガ達五人のＦチームがそれぞれ分かれて四機のＴＫ―５３に乗ることに。その中の最初倉庫で発見された指揮官機は、オルガとユージンの二人で乗ることになった。
「明日はいよいよ教官がお見えになる。粗相のないよう、戦車を綺麗にするんだぞ」
「どんな人なんだろう～」
河嶋のその言葉を締めに、それぞれのチームがそれぞれの戦車の元へと向かった。
その日はそのまま、長年放置されていた戦車の洗車をすることになり、皆思い思いに

戦車を綺麗にしていったのだった。それが終わる頃にはすっかり夕暮れ時になり、始業と同じく河嶋の号令で解散と相成ったのであった。

◆

その翌日。

「おいやべえぞ!このままじゃ遅刻だ!」

「は、早くっ、行かなきゃっ……!」

前日の疲れが溜まってか、みほとオルガは完全に家を出る時間を遅れてしまった。お陰で通学路をダッシュで行かねば間に合わない状況まで追い込まれてしまっている。

と、そんな感じで全力疾走していた、その途中。

「あっ……」

「……なんだありゃ」

みほそオルガの前に、今にも倒れてしまいそうなほどフラフラな人がいた。

制服からして、恐らく自分たちと同じ大洗の生徒だろう。そのままぐったりと項垂れると、それっきり動かなくなってしまった。

「大丈夫ですか?」

みほが声を掛けると、ようやくその女生徒が口を開いた。
「……辛い」
「え？」
「……生きているのが、辛い。これが夢の中なら……良いのに……」
「あ、あのっ!?」
今にも消え入りそうな声で独り言のように呟きながら、その生徒はそのまま座り込んでしまった。
「しっかりしてください……！」
みほが持ち上げると、その生徒は顔を前に向けた。
「……だが、行く。行かねば……」
が、すぐにまたフラフラになってしまった。さながら仕事帰りに呑んだくれたサラリーマンのようである。
「……ったく、しゃあねえな。ほら」
オルガは溜息をつくとその生徒の前に立ち、背中を差し出した。
「……？」
「送ってってやる。今のあんた、危なっかしくて見てらんねえからな。そんな千鳥足じゃ学校に着くどころか、車に衝突して事故っちまいそうだ」

「……すまない」

そう一言呟くと、その生徒は全身の力が抜けたように倒れ、オルガの背中に収まった。

一瞬屈しかけるも、そのままおぶるような形で、立ち上がる。

よくよく考えたら、男子高校生が同年代の女子（恐らく）をおぶって学校に連れて行くのは、それはそれで問題のある気がして来たが……まあ今は非常事態だ。致し方あるまい。

そう心の中で自分を納得させると、オルガはみほの方を振り返り、苦笑した。

「みほ、行くぞ。どうせ遅刻だろうけどな」

「あはは……」

みほは困ったような笑みを浮かべつつも、特にオルガを責めるようなこともせず、そのまま学校へと三人で向かっていった。背中では、先の生徒が気持ちよさそうに寝息を立てていた。

「ったく、呑気なやつだな……」

◆

学校に着くと三日月と、おかっぱ頭の女子の二人の風紀委員が、名簿を片手に立って

いた。
「冷泉さん。これで連続２４５日の遅刻よ。……って、聞いてるの？」
「ｚｚｚ……」
「おーいあんた、もう着いたぞ。起きろって」
「ｚｚ……むっ……もう学校か……短い楽園だった……」
何やらよくわからない事をぼやきながら、冷泉さんと呼ばれた生徒がオルガの背中から降りる。その時の足取りも、かなり怪しいものではあったが。
「駄目だよオルガ。遅刻しちゃ」
「悪いなミカ。でも仕方ねえだろ、今日は」
「駄目。いくらオルガでも、そういうのは特別扱いしちゃいけないと思うから」
そう言って、名簿に記入をする三日月。あくまでも実直に、風紀委員としての責務を果たしていた。
その態度に驚きながらも、オルガは真面目だな、と感心する。昔から三日月は、自分の与えられた役割は最後まできちんとこなす真面目なやつだ。
「……ていうか、やっぱり麻子だったんだね」
「知り合いか？」
「まあちょっと。……朝起きるのが辛いのも分かるけど、何度も遅刻するのはダメだ

よ、麻子」
「……三日月か……。私の方が一個学年上なんだから、もっと敬ってくれても良いんじゃないか……?」
「そういうことは、一回でも遅刻しないで来れたら言ってね。いくら頭が良くても、こんなに遅刻ばっかしてたら、留年するよ」
「……小生意気な奴め……」
　慣れたようなやり取りを繰り広げる三日月と麻子。先程『連続２４５日の遅刻』というパワーワードが聞こえたが、恐らくそのせいだろう。麻子の方が一年上、即ちオルガ達と同学年という事だが、今のやり取りではどっちが上級生が分かったもんじゃない。
「えーっと、西住さんとイツカくん?もし途中で冷泉さんを見かけても、今度からは先に登校するように」
「え?あ、はい」
「あ、ああ。分かった」
　オルガとみほをみて、おかっぱ頭の風紀委員が忠告してくる。その様子を、麻子が恨めしげに見つめた。
「……そど子……」
「何か言った?」

「……別に」
　その後解放され、三人は教室へと向かった。あいも変わらず、麻子はみほとオルガに支えられながらだったが。
「……二人とも、悪かった」
「あ、いえ」
「良いんだよ。どんな事情であれ、困ってる奴は助けんのが筋ってモンだ」
「……いつか借りは返す」

◆

「オルガー、遅えぞ」
「悪いな。ちと色々あってよ」
　校庭に向かうと、当然ながら既に全員が揃っていた。皆昨日組み分けられたチームに分かれて、それぞれ談話している。
「遅いから心配しました」
「寝過ごしちゃって……」
「教官も遅いー……焦らすなんて大人のテクニックだよねー」

そう。今日はいよいよ戦車道の教官がこの学園に来る日なのだ。昨日洗車を終えた戦車とモビルワーカーは、既に自動車部の手によって修理が施され、いつでも走れる状態になっている。

沙織が退屈そうにぼやいていると、オルガの隣にいた三日月が、何かに気づいたように上を見上げた。

「ん?どうしたミカ」

「……何アレ」

三日月が視線を向けた方向を見ると、上から何かが降ってくるのが見えた。

「……なんだありゃ」

小さな飛行機の後ろから、パラシュートのようなものが展開する。そしてパラシュートに引っ張られ、飛行機から滑り落ちるように、何かが下へ落ちて来た。

人かと思ったが、違う。あまりにもデカすぎる。というか、その四角形状のフォルムと、前面に大きく突き出た円筒は、どこからどう見ても――

「……戦車!?」

空から戦車が降って来た。しかもただの戦車ではない。明らかに普通の戦車とは一線を画す巨大さだ。遠目からでも分かる。

「あ、あの巨体はもしや、ＹＭＴ―０５、ヒルドルブではないですか!?あんなレアな機体

を、この目で見ることができるなんて!!」

その戦車を見て、真っ先に興奮した声を出したのが優花里だ。形式番号まで述べて、うっとりとした表情をしている。

「……ヒルドルブ？なにそれ」

「大昔、【厄祭戦】時代に開発された、超弩級試作可変戦車ですよ!!主砲は大口径の３０ｃｍ砲で、使われなくなった戦艦の砲門が再利用されたとか!!他にも色々あるんですけど、特徴は何と言ってもその破格の巨体と、モビル形態と呼ばれる形態への変形機構ですね!!あ、ヒルドルブっていう名前は、北欧神話に登場する神オーディンのあだ名である、『戦の狼』から採られたらしくて……！」

「ストップストップ！また暴走しちゃってるから！」

「ハッ……！」

三日月の質問に答えた優花里がだんだん熱を帯びて来たので、沙織が急いでセーブに入る。優花里はハッとなると、一気にカァッと、頬を赤らめた。

「すいません。また熱くなってしまって……」

「……よく分かんないけど、凄い戦車って事？」

「そう！そうなんですぅ！」

「……ところでさ、厄祭戦ってなんだったっけ」

「それはですね武部殿。今から数百年前に起こった＿＿＿＿＿＿＿＿」

そんなやり取りを繰り広げていると、先ほどのヒルドルブが柵越しにオルガ達の前までやって来た。

すると機体のハッチが開き、中からゴーグルヘルメットを被った女性が現れた。

「こんにちわー!」

『……』

流石にあのインパクトが溢れすぎた登場の後では、誰も返事を返すことはなかった。

◆

「特別講師の戦車教導隊、蝶野亜美一尉だ」

「……女?」

「……騙された」

「でも、素敵そうな方ですね」

生徒会の言葉から、てっきりイケメンが来るものだと思ったのだろう。沙織ががっくりした様子で呟いた。なお一応言っておくと、生徒会は嘘はついていない。『カッコいい教官が来る』と言っただけで、それが男だとは一言も言っていないからだ。

「よろしくね！戦車道は初めての人が多いと聞いていますが、一緒に、頑張りましょう！……あら？」

皆を見渡していた蝶野が、みほとオルガの所へ目を向け、そこで視線を止めた。そして、二人に近づいてくる。

「西住師範のお嬢様とご子息じゃありません？師範にはお世話になってるんです。お姉様もお元気？」

「あっ、えっと……」

「……まあ、ぼちぼちってとこです」

急に振られたみほとオルガは、苦虫を噛み潰したような表情で答える。蝶野はここで二人に会えたことが嬉しいのか、その様子に気づくことはなかったが。

「西住師範って？」「有名なの？」「ていうか、あの二人って兄妹だったんだ」「でもでも、名字が違うよ？」

蝶野の発言に、周囲がにわかに騒めき出す。それに答えるように、蝶野が他の生徒の方を向いて答えた。

「西住流って言うのはね、戦車道の流派の中でも、最も由緒ある流派なの」

「……もういいでしょう、この話は。それで、今日はどういう練習を行うんですか？」

オルガが話題を切り替えるように訊くと、蝶野は笑って答えた。

「そうね!本格戦闘の練習試合、早速やってみましょう」
「「えっ!?」」
蝶野の述べた練習内容に、またも周囲が騒めき出す。
「いきなり実戦練習かよ」「燃えて来たぜ!」
「でもいきなり、大丈夫なんですか?」
「大丈夫よ。何事も実践実践!戦車とモビルワーカーとモビルスーツなんて、バーッ!と動かしてダーッ!と操作してドーンッ!と撃てばいいんだから!」
随分とアバウトな、しかし妙に頼もしい声音で蝶野が話す。しかしそれを聞いてもなお、多くの生徒の顔は晴れなかった。
蝶野は目印がいくつか付いた地図を広げると、指示をした。
「それじゃ、戦車とモビルワーカーと、モビルスーツ……は流石に無いか。に、乗り込んだら、それぞれスタート地点に向かってね」
その言葉を皮切りに、全員がそれぞれ乗る戦車、モビルワーカーに向かっていった。

◆

「これ、どうやって動かすんだろ〜」

「知ってる人に聞いてみたら？」
「ネットで聞いた方が早いんじゃない？」

「ここで頑張ればバレー部は復活する！あの廃部を告知された日の屈辱を忘れるな！ファイトーッ！」
『オーッ!!』

「初陣だー！」
「ここはパンツァーカイルで」
「一両しかないじゃん」

「はい！みんな早く乗り込んで！」
蝶野の指示で、バラバラになっていた全チームが、それぞれの戦車、モビルワーカーに乗り込んだ。
ほぼ全員が慣れない手つきで動かそうとしている中、少なくはあったが慣れた手つきで始める者もいた。
「へっへ～、確かこうしてこうやってぇ～、っと……」

「あん?なんだシノ。お前動かし方知ってんのか?」
「へへっ、ガキの頃に少しな。あと、ヤマギとかに色々聞くからよ……あん?」
その中の一人であるシノが、鼻歌交じりだった調子の良い声を止め、疑問符を浮かべる。
オルガはそちらに向かうと、中を覗き込んだ。
「どーしたー?シノ」
「おぉオルガ。いやそれが、なんかシートに見たことねえ機械があってよ……なんだこれ」
そう言ってシノが示したのは、シートの上部に設置された機械だった。中央部に丸い形状があり、その中に緑色の球状のセンサーの様なものが埋め込まれている。
オルガはそれを見て確認すると、思わず感嘆の声を漏らした。
「こいつぁ……阿頼耶識システムだな」
「アラヤシキシステム?なんだそりゃ」
シノ再び疑問の声が上がる。だが、それも当然だろう。何しろこのシステムは、オルガですら分からないことの方が多いからだ。
「大昔に造られたインターフェースシステムだ。ここの機械が搭乗者の脳波を検知して、その意思を機体に直接伝えるシステム、だったか。……まあ簡単に言や、自分の思

い通りに機体を動かすための、中継器ってとこだな」
「へぇーっ！よく知ってんなオルガ！いやー、洗車ん時に見逃してのかもなぁ、俺」
「昔同じやつを見たことがあってな。しっかし、まさかシノのモビルワーカーにも搭載されてたとはな……こいつは色々不安定なもんが多いとかで、今じゃ殆ど載せてる機体は無かった筈だが」
「も？てことたぁ、オルガのやつにもか？」
「まあな。しかもご丁寧に、運転席と指揮官席に二つずつな」
昨日の洗車の段階で発見したが、確かに最初倉庫に置かれていた指揮官機の物にも、同様に阿頼耶識システムが搭載されていた。元々はモビルスーツ用に開発されたという話だったが、恐らくはインターフェースのみモビルワーカーに移植したのだろう。
さらに他のモビルワーカーも確認してみると、なんと全部の機体に阿頼耶識システムが搭載されている事が分かった。これはどちらかと言えば嬉しい誤算だ。このシステムは搭乗者の空間認識能力や、反応速度に依存した不安定なシステムだが、使い熟せば大きな武器になるだろう。
無論それだけで勝てるほど甘くはなく、あくまでも補助の役割なので、ちゃんと練度を上げなければあまり意味は無いのだが。
そうこうしているうちに全員が戦車やモビルワーカーに乗り終え、戦車の方は役割で

ある【車長、砲手、操縦手、装填主、通信主】を決め、いよいよ戦車を動かす時がきた。
「……鉄臭いです……」
「狭い上に暑苦しい……。こんなんでドライブすんのー?」
　AチームのⅣ号に乗り込んだ、華と沙織が苦言を呈す。ちなみに役割は車長が沙織、砲手が優花里、操縦手が華、装填主、通信主がみほという構成だった。
　すると戦車内に、蝶野の声が響いて来た。
『それでは。全戦車、パンツァー・フォーッ!』
「ふへへ……ついに戦車を動かす時が……!」
「あのー、どうやって動かせばいいんですか?」
　操縦手になった華が、みほに操縦方法を求めてくる。
「まず、イグニッション入れて」
「これですか?」
　前面にあったボタンの一つを押すと、戦車がブルルッ、と震えた。エンジンがかかり、背面から排気ガスが噴き出す。
「ひゃっほーぅッ!最ー高だぜぇッ!!」
「……人が変わった」
「……パンツァー・ハイ……」

「ハッ……！すいません……」

同時に、優花里のエンジンも掛かったようだった。

「あのー、それからどうすれば……」

「後はアクセルを踏んだら前進。前のレバーが操縦桿で、右がシフトレバー」

「分かりました」

『みほー、先行ってるぜ！』

「あ、うん！」

外を見ると、既にオルガ達モビルワーカー勢や、他のチームは外へ戦車を動かし始めたようだった。モビルワーカーの方は戦車と比べると幾ばくか軽やかな動きで、外へと走り出す。

みほ達も皆に続くように、外へと戦車を前進させていったのだった。

第参話　試合、やります

練習開始後、各々のチームは戦車を動かし、指定されたポイントまで移動していった。なお、モビルワーカーの方は全て1チームにするとバランスが悪いので、それぞれ一台を分隊とし、数えることになった。

『おお！この阿頼耶識って奴凄えな！本当に思い通りに動くぜ！』

『うん。操縦はマニュアル読んでるけど、自分が動かしたい方向に動いてくれてる気がする』

『あくまでも補助だから、あんまそれに頼りすぎんなよ』

「……なんか、あっちの方は運転楽そう」

「阿頼耶識搭載のモビルワーカーですかぁ……どんな感じに動くんでしょう！」

ＬＣＳのオープン回線から聞こえて来たモビルワーカー勢の声に沙織が不平を漏らし、優花里がまたも好奇心に溢れた声を出す。どうやら、守備範囲は戦車のみではなかったらしい。

そのまま走行を続けて、やがて山林の中のあるポイントで停止した。渡された地図によれば、ここが指定されたポイントのはずだ。

『みんな、スタート地点に着いたようね！』
ポイントで停止してから程なくして、回線から蝶野の声が聞こえて来た。どうやら、全員がスタート地点に着いたらしい。
『ルールは簡単。時間切れまで耐えるか、全ての車両を動けなくするだけ。つまり、ガンガン前進してバンバン撃って、やっつければいいわけ！分かった？』
随分とアバウトな説明だったが、全員が大体のルールを把握したようだった。
『戦車道は礼に始まって、礼に終わるの。一同、礼！』
『よろしくお願いします！』
蝶野の合図で、全員が車内でお辞儀をする。
『それでは、試合開始！』
その声と共に、試合がスタートしたのだった。

◆

「そんでオルガ、どうするよ。取り敢えず撃ってみるか？」
「ちょっと待てよ。闇雲に撃ったら、敵に居場所を教えるようなもんだ。まずはここから……」

試合がスタートしてしばらく。オルガとユージンが乗る【ＴＫ―５３】指揮官機は、ひとまずそのままの状態でいた。まだマップを完全に把握しているわけではないので、進路を決めてから行く事にしよう――――と、考えていたその時。

――――ドゴォォォオンッ!!

オルガ達の周囲に、轟音が響き渡った。

「うおわぁっ?!じ、重砲?!どっから?!」

「落ち着けユージン！あれは……」

オルガが周囲を見渡すと、茂みの向こうからⅢ号突撃砲の砲口がこちらを狙っていた。どうやら、既にこちらの動きは掴まれていたようだ。

「……まずは二人乗りを叩くぞ」

「了解」

「賽は投げられたか」

「取り敢えず逃げるぞ！ユージン移動！」

「移動はいいけどよ、どうすんだよ！」
「大丈夫だ。あのタイプの突撃砲は砲塔が曲がらねえ。こっちを追撃するには時間がかかるはずだ。その内にルートを迂回して、なんとか撒くぞ！」
　オルガの指示のもと、ユージンがモビルワーカーの操縦桿を握り、走り抜ける。阿頼耶識システムの恩恵とモビルワーカーの機動性によって、どうにかⅢ突を撒くことに成功する。オルガの言葉通り、砲塔が曲がらないⅢ突はこちらを追撃するまで時間が掛かるだろう。
　だが、もちろん敵は、彼女らだけではない。
「よっし、上手く撒けたな……」
「おいオルガ、前！前！」
「ああ？」
　ユージンの焦ったような声に反応して前を見ると、二つに分かれた道の左側に、青色のモビルワーカーが見えた。既に二つの砲塔はこちらに向けられており、いつでも撃てる構えだ。
「あの機体は昭弘か……！右斜め前だ！」
「お、おう！って、早速撃ってきやがった!?」
『お前ら！この勝負、勝たせてもらうぜ！』

「昭弘の野郎……！」
　オルガの指示が終わると同時に、昭弘の駆るモビルワーカーから砲撃が放たれる。昭弘の挑発に毒づきながら、ユージンはどうにか右方向の道へと向かっていった。銃弾も音も止み、相手からどんどん離れていく。
「ふぅ……なんとか撒けたな」
「ったく、ハナっからヘビーすぎるだろ……」

◆

　その後、みほ達と協力する事にしたオルガ達は、砲撃地帯を少し抜けた草原の方へと前進していた。
　敵は追撃を諦めたのか、はたまた振り切ったのか。どちらにせよ、敵の砲撃から逃れられたのは僥倖だ。心理的にも作戦的にも、ほんの少し余裕が生まれる。
　今はオルガ達のモビルワーカーもみほ達のⅣ号に合わせて速度を落としているが、普通に走ればⅢ突が追いつく速度ではない。
「ここまでくりゃ、ある程度時間に余裕があるな。……みほ、これからどうする？」
『うん。まずはここを抜けて――――――』

と、みほと今後の打ち合わせをしていた、その時。
「ッ!?ユージン、スピード落とせ！」
「うぉっ!?ど、どうした!?」
「そこのお前！危ねえぞ！」
オルガの視線の先に、人がいたのだ。
制服を着ていることから、大洗の生徒だ。進路上に置かれていた切り株を枕代わりにして、顔の上に本を乗せて寝ている。その生徒は起き上がると、オルガ達の方へとのろのろと歩き始め、眼前に迫った所で飛び上がり、オルガ達のモビルワーカーの上に飛び乗った。――――ただし飛距離を見誤ったのか、飛び乗った瞬間に「ぴぎゃっ……」と間抜けな声を出していたが。
「っ、お前、今朝の……」
飛び乗って来たのは、冷泉麻子だった。
今朝より幾ばくかハッキリとした、しかしまだ気怠さの残った雰囲気で、オルガの前に立ち上がる。オルガ達は一度安全のため、会話が聞こえる程度にスピードを更に下げた。続くように、並走していたみほ達もスピードを下げ、さらにハッチからみほが身体を乗り出してくる。
「オルガー、どうしたの？」

「いや、それがよ……」
オルガが説明しようとすると、みほの後方のハッチから頭を出した沙織が、麻子の姿を確認して驚いたような表情になる。
「あれ？麻子じゃん」
「……沙織か」
麻子も沙織を知っていたようで、名前を呼んで反応した。
みほが沙織に尋ねる。
「あっ、お友達？」
「うん、幼馴染。……何してんのこんなところで。授業中だよー」
「……知ってる」
「……はぁ、またサボりね」
沙織は慣れたような口調で、深くため息をついた。

◆

その後、モビルワーカーの方にはスペースがなかった為、麻子はみほ達のⅣ号側に乗ることになった。「……酸素が薄い……」と呟きながら、辛そうに目を細めていたが。ど

うやら、彼女は低血圧らしい。朝が辛いのもそのせいだとか。

―――――――ドッゴオオオオ!!

そうこうしていると、再び敵からの砲撃が降り注いできた。Ⅳ号とＴＫ―５３の周囲を土煙が舞い、強い衝撃が内部を揺らす。

そうして逃げ回っているうちに、二台とも吊り橋の付近まで追い込まれてしまっていた。ＴＫ―５３がⅣ号の背面を守るような形で橋の前に立ち塞がり、Ⅳ号は橋のど真ん中で立ち往生している。

「――――――撃てーいッー!」

―――――――ドガァァァァッ!!

そしてそんなⅣ号の隙を突くように、オルガ達が見張っていた方向より反対の方向から、Ⅲ突の重砲が鳴り響き、Ⅳ号に命中した。

「っ、みほ!・大丈夫か!?」

「私は大丈夫！でも華さんが……！」
「何だとっ!?」
　後ろを振り向くと、ハッチからぐったりとした様子の華の姿が見えた。どうやら、先の重砲の衝撃で失神してしまったらしい。顔を出した優花里が、「操縦手失神！行動不能！」と報告していた。
「おいオルガ！なんか囲まれてんぞ!!」
「何っ!?」
　ユージンの報告に、急いで周囲を見回すと、オルガ達がいた方向からシノのＴＫ―５３、生徒会Ｅチームの３８（ｔ）、一年ＤチームのＭ３が向かって来ていた。更に別方向からは歴女ＣチームのⅢ突と、バレー部Ｂチームの８９式、昭弘のＴＫ―５３が迫って来ていた。
　最悪の展開である。挟み撃ちにされた上に、下手に動けば集中砲火を浴びてしまうだろう。モビルワーカーは機動性の代わりに、戦車と比べて装甲が薄い。集中砲火を浴びては生き残ることが出来ないだろう。
「みほ達も動けねえんじゃ……」
　と、その時だった。
『……オルガ』

「……っ！ようやくか……！」

突如入ってきた通信に、オルガは不敵な笑みを浮かべる。

「おいおいどうすんだよ！俺らこのまま挟み撃ちで全滅かよぉっ!?」

「いいや違うな」

ユージンの動揺した声音に、オルガは自信に満ちた声で返す。先ほど入って来た通信は、少なくともこの状況から立て直すことが可能な一報だった。

「はぁっ？」

「そんなので、終われるわけがねえ。なぁ……ミカ！」

『　　ごめん、待たせた』

オルガの声と共に、オルガ達の眼前にいたチームの更に後方から、白のモビルワーカー　　三日月の駆るＴＫ―５３がやって来た。

「なっ!?嘘だろっ!?」

シノが混乱した声を上げるも、遅い。三日月のＴＫ―５３はすぐにシノの後方に回ると、二門の３０ｍｍマシンガンを斉射。不意をついた事もあってか全発が命中し、シノの機体はたちまち崩されてしまった。

「……っ！」

しかし、すぐさま機体を回転し、別方向へと走行する。瞬間、先程まで三日月の機体がいた地面の上に弾痕が走り、後方に青のモビルワーカー――――昭弘の機体が待ち構えていた。どうやら別のルートを迂回して、三日月の後方まで来たようである。

「このタイミングで躱すかよっ、三日月!!」

「へっ……」

その回避の手応えに、思わず得意げになって舌を出す。さらに砲塔を昭弘機に向けると、一瞬の猶予も許さず斉射。完全に不意打ち狙いだった昭弘機は対応しきれず、瞬く間に白旗判定となってしまった。

『Ｆチーム第三分隊、ＴＫ―５３の３番機。並びに第四分隊の４番機。共に行動不能！』

◆

「……すっごぉ……」

その光景を見ていたみほ達Ａチームは、思わず感嘆の声を漏らしていた。前方で繰り

広げられていた、三日月機による交戦。モビルワーカーの長所を活かした高機動戦と、阿頼耶識システムの補助の性能。そして何より、三日月の腕。今日初めて操縦したとは思えないほどの、圧倒的な技量だった。

「あれも、阿頼耶識ってやつのおかげなの？」

「さぁ……」

『よし、今のうちに立て直すぞ！橋の上じゃ不利だ。みほ！後退できるか!?』

「っ、そうだ！運転は苦手だけど、こうなったら……うわっ!?」

そうして呆然としていたところに、オルガからの通信が入ってくる。

今みほ達は運転手を欠いた状態だが、いつまでも橋の上で立ち往生する訳にもいかない。みほが運転を変わろうとした、その時。

突然Ⅳ号が動き始め、後方へとバックしていった。

運転席を見ると、そこには麻子が座っていた。前にマニュアルを設置し、ページをめくりながら操縦桿を握っている。

「麻子運転できたんだ!?」

後ろから覗き込んだ沙織が、心底驚いたような声を挙げる。

「……今覚えた」

「今!?」

「さっすが学年主席……」
あっけらかんとそう言ってのける麻子に、流石の優花里も驚いたようだった。
それを見て大丈夫と判断したみほは、すぐさま通信をオルガにつなげる。
「オルガ！こっちは大丈夫だから、地上に出て！」
『分かった！』
みほからの指示を受け、オルガが橋から地上へ進む。

「とにかく撃ち込め！」
「連続アターック！」
『それそれそれぇっ!!』

「おい、撃ってきたぞ！」
「みほ達が立て直すまで耐えるぞ！こっちも撃ち返せ！」
「お、おう！」
みほ達が橋の上で硬直しているのを好機と見たのか、Ｂチームの８９式から機関銃砲が放たれる。オルガ達はその前に庇うように立ち塞がると、機体両側に備え付けられた３０ｍｍマシンガンを斉射した。

弾は全発とまではいかずともかなりの数が命中し、８９式は白煙を吹いて白旗を上げることになった。

「――――あとは頼んだぜ！・みほ！」

◆

「分かったよ！・オルガ、そこから退避して！・――――秋山さん、砲塔を回転させて！」

『分かった！・ユージン移動だ！』

「っ！・了解！」

みほの指示のもと、Ⅳ号の砲塔が回転。同時にオルガ機はⅣ号の射線から離れるように移動した。

砲塔は百八十度回転し、Ⅳ号の向きと反対方向にいた、Ⅲ突へと射線が向けられる。

「発射用意――――撃てッ!!」

――――ドッゴオオオオオオオオッ!!

空気が震えるような鳴り響く轟音と白煙と共に、Ⅳ号の７・５ｃｍ砲撃が放たれた。

砲弾は直線を描いて放たれ、鼻先に捉えたⅢ号突撃砲を捉えると、爆音とともに命中した。Ⅲ突は白旗を上げ、行動不能となる。

「……すご……」

「ジンジンします……」

「何だか……気持ちいい……」

「……」

みほを除くＡチームの全員が、その砲撃の轟音と衝撃に驚愕していた。約一名、変な驚き方をしていたが。

『有効！Ｃチーム、行動不能！』

「っ、また来る！」

しかし、喜んでいたのも束の間。背後から生徒会が乗る３８（ｔ）が迫って来ていた。砲門をこちらに向け、今にも撃てる構えだ。

「ふっふっふっ……ここがお前らの死に場所だ！」

Ⅳ号も砲塔を回転させ、３８（ｔ）へ照準を絞る。

「撃てッ!!」

次弾が３８（ｔ）の砲撃と同時に放たれ、３８（ｔ）の躯体に命中する。一方、３８（ｔ）が放った砲撃は的外れの方向へと飛んで行った。

命中した砲弾は３８（ｔ）から白煙を噴かせ、白旗が上部から飛び出た。

「あーあ、やられちゃったね」

「桃ちゃんここで外す……？」

「桃ちゃんと呼ぶなぁっ！」

「やっぱ西住流半端ない！」

「逃げよ逃げよ！」

「そうしよそうしよ！」

「急げー！」

「逃げろーっ！」

遠くからその戦闘を見ていたＭ３も、逃げようと履帯を回転させる。

『逃すわけないでしょ』

だが、それを待ち構えていたように三日月のＴＫ―５３が先回りし、３０ｍｍマシンガンを叩き込んだ。弾丸は履帯と本体を直撃し、Ｍ３も白旗判定となる。

そして次の瞬間。

『タイムアップ!!試合終了!!』

通信から、蝶野の声が聞こえてくる。どうやら残ったオルガ達三チームが決着を付けるより前に、制限時間が来てしまったようだ。その場で残ったⅣ号と、ＴＫ―５３二台が停止する。

『Ｄチーム、Ｍ３。Ｅチーム、３８（ｔ）。Ｃチーム、Ⅲ号突撃砲。Ｂチーム、８９式。いずれも行動不能。よって。Ａチーム、Ⅳ号。Ｆチーム第一分隊、第二分隊、ＴＫ―５３の勝利!』

「……私達、勝っちゃったの?」

「……みたいです」

ハッチから顔を出した沙織と華が、信じられないと言わんばかりの声音でそう呟いた。

「ああ…っ、何とかな」

オルガもまた張り詰めた気をほぐすように、背を伸ばしながら返す。
「凄い……！西住殿のお陰です！」
同じくハッチから身を乗り出した優花里が、感極まった様子でみほに抱きついた。
「……勝ったというか、タイムアップで生き残ったという方が正しいな」
一方で、冷静に勝負の結果を分析する麻子。すると近くにいた三日月が、そちらに視線を向けた。
「……ていうか、なんで麻子がいんの？戦車道取ってたっけ」
「……三日月……何故お前が」
「俺、戦車道だったから。それより、どうして？」
「……別に。ちょっと、借りを返しただけだ」
「ふーん……」
お互い口数少なく、やり取りを交わす。だが、両者ともお互いの言いたい事が分かったようで、それ以上は特にやり取りも――――否。
「……ん」
「……？」
「……火星ヤシ。食べる？」
「……貰う」

三日月がポケットから火星ヤシを取り出し麻子に渡すと、摘んで一つ口に放った。三日月も別のを取り出すと、自身も口に運んでいった。
そこからの事は回収班に任せて、皆校庭の方に戻っていったのであった。

「……やはり、あの二人に戦車道を受講させたのは正しかった」
「……作戦通りだね」

その裏で生徒会は、目論見が成功したように不敵な笑みを浮かべていたのだった。

◆

翌日。
『……』
オルガのみほは、身の前に広がった光景に呆然としていた。
目の前には、戦車やモビルワーカーがある。先日使用したものなので、特にその形状に目新しさはない。
しかし前日までと確実に異なるのは、みほ達のⅣ号や、オルガ、三日月、昭弘のＴＫ

―５３以外は、それぞれが色を塗り替えられていた事だった。
その塗り替えた色も赤やピンク、中には金色という派手にも程があるカラーリングまである始末だ。また色は塗り替えてないものの、側面に【バレー部復活!!】と大きく書かれたものまである。

「かっこいいぜよ」
「支配者の風格だな」
「うむ」
「私はアフリカ軍団仕様が良かったのだが」
歴女のＣチームのⅢ突は、赤と黄色のカラーに、上には二枚の旗が立てられているという、あまりに目立つ出で立ちだった。彼女達らしいと言えば、彼女達らしい戦車だろう。

「これで自分達の戦車がすぐに分かるようになった――」
バレー部のＢチームはカラー変更はしてないものの、側面に【バレー部復活!!】と大きく描かれている。確かにすぐに見分けはつくだろう。

「やっぱピンクだよねー！」
「可愛い！」
「おっ！お前らその色チョイスするとは、センスあるじゃねえか！」
「あれ？シノ先輩もピンク色にしたんですか？」
「おうよ！名付けて……【流星号】だっ！」
『おぉ～!!』
　一年のＤチームと、シノは自機を派手なピンク色に変えていた。しかもシノに至っては、【流星号】という新しい名前まで付けている。

「いいねぇ～……この勢いでやっちゃおっか」
「はっ。連絡してまいります」
「えっ？何ですか？」
　そんな個性的なカラーリングの中でも一番目立つのは、生徒会のＥチームだろう。なんと全面金色という、どこかの大尉の機体のようなカラーリングだ。

「昭弘も色変えなかったんだ」
「ああ。別に色に拘りねえからな。今でも十分目立つしよ。つーか、それ言うならお前

もだろ」
「うーん、俺もいいかなって。白色ってのも、なんか好きだし」
「ま、俺とオルガのに至っては形ですぐ分かるからな」
一方で三日月、昭弘の機体はそのままだった。元より発見された当初からカラーリングが特徴的だったのと、二人とも特にそういうのには頓着しない性格だ。自分のだと見分けられれば十分という、ストイックな考えだった。
そしてそんな二人を除く全員の戦車の中で、元のカラーリングだったⅣ号とＴＫ―５３指揮官機は、この個性の爆発事故現場のような空間にあって、逆に違和感を放っているとも言えた。
「あぁ～っ!!３８（ｔ）が！Ⅲ突が！Ｍ３が８９式がＴＫ―５３がなんか別のものにい～っ!!あんまりですよねっ!?」
「ったくあいつら……」
優花里はそんな機体を見て、ショックを受けたように頭を抱えて絶叫した。オルガも苦笑して、頭をかく。
しかし、優花里が同意を求めるように聞くと、みほは――――
「ふふっ、ふふふっ……！」
「に、西住殿？」

「みほ？」

みほは、心の底から可笑しくて、でも――――それと同じくらい、楽しくて仕方がないという様子で、笑っていた。

「戦車やモビルワーカーをこんな風にしちゃうなんて……考えられないけど、なんか楽しいね！戦車で楽しいなんて思ったの初めて！」

「っ……！」

みほが、戦車で初めて、笑った。

その事実に、オルガは驚くと同時に、胸の中に嬉しさが込み上げてくるのが分かった。

今までは家に言われるがまま、そこに楽しさを見出す余裕もなく、やっていた戦車道。

当然みほは、それを好きになれるはずも無く、さらにあの事件をきっかけに、もう二度と戦車はやらないだろうと思っていた。

それが今、こんな風に仲間に囲まれて。

戦車を見て、久しく見ていなかった程の笑顔を浮かべている。

その事実だけが、オルガにとって充分だった。

「(そうか……やっぱりここは、みほの居場所、なんだよな)」

この光景を見れば、改めてそう思える。

仲間と笑いあえるこの場所が。みほの辿り着いた居場所なのだと。

「(だったら……俺に出来る事なんて、決まってる)」

――――――守る事。

みほの笑顔を。この居場所を。守る事が、今のオルガに出来ることだ。

――――――かつて自分から手放したそれを、今度は絶対に離す事のないよう。

オルガは、自分に固く、鉄のように強く決意した。

◆

聖(セント)グロリアーナ学園艦、旧称【ハーフビーク級】戦艦。

今は宇宙を飛ぶその艦内の一等地に建つ、学園艦と同じ名を持つ学校、【聖グロリアー

ナ学院】。

その一室で、四人の男女が優雅なティータイムを楽しんでいた。その部屋の一番目立つ位置にある絵画には、黄金の二刀を携えた、白と青の騎士が、戦車を守るように描かれている。

「……大洗学園？……戦車道を復活されたんですの？おめでとうございます。……ええ、結構ですわ。……受けた勝負は逃げませんの」

今時古風なダイヤル電話を片手に、そう話す少女――――ダージリンは、嫋やかな、しかし芯にある強さを感じさせる笑みでそう言い結び、電話を戻して紅茶を口に運んだ。

「……我々に試合の申し込みでも、あったのかな。ダージリン」

そう言って優雅に紅茶を飲む男は、口元に笑みを携えて訊いた。

「ええ。大洗学園ですって。今年から戦車道を復活されたようで、その練習試合の相手になって欲しいと」

「成る程。……であるならば、確かに。我々聖グロリアーナが、受けないという手を取るわけにいかないな」

「ええ。でも……ひょっとしたら、貴方の出番は無いかもしれないわよ？マクギリス」

「そうなれば、それでもいい。君のその強さと可憐さは、今更疑うべくも無いからな」

「あら。相変わらず、口の上手な事」

ふふふ、ははは、と互いに笑みを交わすダージリンと、男――――聖グロリアーナ三年生、マクギリス・ファリド。

その様子を見ていた両隣の女生徒――――オレンジペコとアッサムは、いつもの事だと気にすることもなく、優雅な手つきで紅茶を口に運んだ。

第肆話　対決！聖グロリアーナです！

「今日の訓練、ご苦労であった」

『お疲れ様でした～』

その後は訓練が行われ、戦車道の試合に於ける基本的な動作を確認した。

縦横隊での行進や砲撃の照準合わせ、開けた場所での戦闘方法、走行法など。ひとまず初心者が覚えておくべき項目を押さえ、この日の訓練は終了した。

戦車隊ではやはり、みほ達Ａチームが一番動きが良かっただろう。経験者であるみほがいるのもあって、成績は一番良かった。

一方、モビルワーカー隊で単純な動きで一番良かったのは、三日月・オーガスだろう。

モビルワーカーに搭載された阿頼耶識システムというＯＳは、パイロットの脳波からその意思を読み取り、感覚的な操縦を実現する補助システムだ。

しかし弱点もあり、阿頼耶識によるその補助は、あくまでもパイロットの空間認識能力や反応速度、脳波の伝達速度に依存する為、使い熟せないと通常の物より動きが落ちてしまうのである。その為現在ではパイロット依存という点が不安視され、ＡＩを搭載した補助システムが主に搭載されている。

だが逆に言い換えれば、それさえ出来ればＡＩ補助の機体よりも優位に立てるという事でもある。ＡＩ補助の機体は安定性に重きを置いており、ある程度サンプリングされた運動性能である為、フレキシブルな稼働を実現する阿頼耶識に運動性では敵わない。

その為戦車と異なり、高機動戦を主として展開されるモビルワーカーの戦いでは、使い熟せば乱戦などで非常に優位に立てるのだ。

だからこそ今回の訓練では、モビルワーカー隊はまず阿頼耶識に慣れるという点に重きを置いたのだが――その中でも三日月はその扱いに天賦の才があったようだ。前回の試合でもかなりの活躍をしていたが、この訓練でさらに上達したようだ。

次に上手かったのが、昭弘・アルトランドだ。三日月ほどでは無いにしろ、どうやら阿頼耶識のコツを掴んだらしい。その次がシノで、最後がオルガとユージンだ。最も、オルガとユージンもだからと言って悪い訳ではなく、三日月達同様コツを掴めたようである。

そんな訓練が一通り終わり、皆が一様に疲れ切った表情を見せる。

そして終了間際に、生徒会からある知らせがあった。

「えー、急ではあるが、今度の日曜に、練習試合を行う事になった」

『!?』

突然の知らせに、皆が一様に驚きの表情になる。

それも当然だろう、何しろ彼ら彼女らは戦車やモビルワーカーを動かしてまだ二日しか経っていない。基本的な戦術どころか、操縦も細かく詰めれば、まだ危うい部分があるのだ。

しかしそんな様子を見ても、生徒会は特に何も反応せず、淡々と告げる。

「相手は、聖（セント）グロリアーナ学院だ」

『っ……』

河嶋から告げられたその校名に、みほ、オルガ、そして優花里の表情が厳しいものになる。

「どうしたの？」

「……聖グロリアーナ学院は、過去に一度全国大会で優勝した事もある強豪です」

「優勝!?」

「はい。その時の隊長である、アグニカ・カイエルという人が凄い隊長で……その意思を継いで、今でも全国大会で上位に入賞しているんです」

「保有してる戦車も、選手の練度も、俺らとは比べ物になんねえ強さだ」

優花里とオルガの言葉に、Ａチームの皆が緊張した面持ちになる。

「日曜は、学校に朝六時に集合！」

そして河嶋が次に告げたその集合時刻に、思いっきり嫌そうな顔をする生徒がいた。

麻子だ。
「……やめる……っ」
「はい？」
「……やっぱり戦車道やめる」
『もう!?』
沙織を除いたAチームの全員とオルガが、一斉に麻子の方を向いて突っ込む。
「麻子は朝が弱いんだよ……」
「だからって辞めるまで言うか……？っておい、ちょっと待て！」
沙織が皆に話してる間に、麻子は列を離れて家に帰ろうと歩き始めた。それを皆が止めようとする。
「ま、待ってください！」
「……六時は無理だ」
「モーニングコールさせていただきますっ！」
「家までお迎えに行きますから！」
「朝飯作ってやっからよ！」
「……朝だぞ。人間が朝の六時に、起きれるか!?」
まるで、『人に羽根を生やして飛べるか？』と同じくらいの無理難題だと言わんばかり

に、今までにないほどの迫真の声で振り返り、みほ達に問い質す。
「いえ、六時集合ですから、起きるのは五時くらいじゃないと……」
優花里が遠慮しがちに補足すると、麻子はコマ回しのように後ろへ向き直し、再び歩かんと前を向いた。
「……人には出来ることと出来ないことがある。これは後者だ。短い間だったが世話になった」
そう言い切り、家に帰ろうとした、その時。
「駄目だよ麻子」
麻子の手を、誰かが強く引き止めた。三日月だ。
「……離せ三日月。これは私の手には負えない案件だ」
「駄目だよ。みんなの事放ったらかして、自分はやめようなんて、そんなの筋が通らない。麻子がいなくなったら、みほ達が困る」
「……私にはもう無関係だ。だから離せ……っ!」
「それにいいの?単位、足りてないんでしょ」
「うっ……!」
三日月が放ったその一言に、麻子は今までにないようなうめき声をあげた。そう。朝の出来事からも分かるように、彼女は遅刻と欠席の常習犯。成績は二年生主席の優等生

だが、その凄まじいまでの遅刻欠席履歴が全てを帳消しにしていたのだ。
「進級できなきゃ、みほやオルガ達を先輩って呼ばなきゃいけなくなるよ。それに、もし麻子が留年したら、俺と同じ学年になる」
「……お前と同じ学年、だと……？ぐぐ……」
「戦車道を取れば、少なくとも二百日分は遅刻が帳消しになるし、授業の単位も三倍になる。進級するには問題なくなるよ」
「……しかし、だな……」
「……それに何より。ちゃんと卒業できなきゃ、おばあちゃんに怒られるよ」
「おばあ……ッ！」
三日月が最後に発した『おばあちゃん』のワードを聞いた途端、まるでゾンビか幽霊にでも出くわしたように震え上がり、やがて諦めたようにガクッと項垂れて言った。
「……分かった。やる」
その言葉に、全員がホッと一息つく。取り敢えず、Ａチームの有力な操縦手を失わずに済んだのだから。
「……それより三日月。そろそろ手、離せ。逃げないから」
「ん？ああ、ごめん」

◆

その日の夕方に行われた会議で、戦車隊隊長をみほが、モビルワーカー隊隊長兼、全隊副隊長をオルガがやる事となった。

聖グロの戦車隊は強固な装甲と連携力を生かした教習戦術を得意としている。その為作戦は、一両が囮となって味方のいるエリアまで引きつけ、残りがこれを叩くというものに決まった。オルガとみほは聖グロが囮作戦を想定し、逆包囲する可能性も進言したのだが、結局押し切られる形となった。

「――――よし、これで装備する武装の確認は終了だな」

「お疲れ、おやっさん」

夜の学園の倉庫で、オルガと褐色肌の大柄な男性、この学園の面々から『おやっさん』と呼ばれ親しまれている、自動車部顧問の非常勤講師、ナディ・雪之丞・カッサパがモビルワーカーの武装の確認作業を行なっていた。その向こうには自動車部の面々が、戦車のチェックを行っているところだ。

「今度の日曜に早速か、例の学校とやり合うのは」

「ああ。それで本土の大洗に行って、いざ試合だな」

「ここも静かになるなぁ。ま、何にせよ初の試合なんだろ?良かったじゃねえか」

「何が良いもんか。向こうの方が戦車の性能も、踏んで来た場数も違う。まともにやり合えば、すぐに終わっちまうだろうさ」
「……そりゃ、なあ。この学校が戦車道をやってたのは、もう何十年も前の話だ。それが急に復活したって、すぐに勝つなんざまあ、普通は無理だわな」
タバコを一服しながら、雪之丞が懐かしがるように言う。彼は今でこそ非常勤講師だが、昔はこの大洗で、よく戦車やモビルワーカーの整備をしていた腕利きの整備士だったようだ。今でも十分に腕利きだが。
しかし、同時に苦労も多かったらしい。義足となっている両の脚が、それを如実に物語っていた。
「まあどっちにしろ、決まっちまったもんはしゃあねえ。やれるだけやるしかねえさ。それに……俺にも意地があるからな」
そう言ってオルガは、倉庫の空いた扉の向こうを見る。それを見て雪之丞は口に入れたタバコを取り出し、煙を燻らせた。
「……カッコ悪いところは見せらんねえよ」
「……西住と三日月には、か？」
雪之丞がそう聞くと、オルガは肯定するように小さく笑った。
それを見て雪之丞もまた小さく笑うと、タバコを地面に落とし、その鉄の義足で踏み

つけた。
「　　苦労すんなぁ。隊長」
「　　そうだな。……あ、そうだ。おやっさん。自動車部の奴らと一緒に、ちと頼みてえことがある」
「うん？何だぁ？」
「実はよ――――――」

◆

宇宙から帰還した聖グロ学園艦は、本土に向けて航行していた。
そしてその学園艦の居住区にある学生寮の一室で、二人の男がティーセットを開いて紅茶を飲んでいた。
「　　しかし大洗か。学園としては特に特筆すべき点もない、地味目な学校だ。俺たちの学校が、わざわざ試合に応じるほどの相手なのか？」
「ああ、確認しておいてくれ。それでは。――――――そんな学校との親善試合は退屈か？ガエリオ――――――ドアーズ」
ドアーズの名で呼ばれた、紫髪の男――――――ガエリオ・ボードウィンは、わざとら

しい退屈げな表情から、一転して親しみのある笑いを浮かべた。
「まさか。紅茶の名前を与えられた者として、試合はきっちりこなすさ。マクギリス――いや、シッキム」
「――大洗は、今年戦車道が復活した、いわばルーキー達だ。そんな彼らの成長を促すためにも、戦車道の先達たる、【聖（セント）グロリアーナ学院】の者として、手本を示さねばな」
立ち上がったシッキムことマクギリスは、窓の向こうを眺めて、前髪を弄った。
その様子を見たドアーズことガエリオは、やれやれと言った様子で手を振り、目を瞑った。
「しかし、向こうはモビルスーツだって持ってないんだろう？そんな素人が、俺たちといきなり戦って大丈夫なのか？正直、同情する」
「――こんな言葉を知っているか？運命は浮気者。どちらに転ぶか分からない……」
「――うちの戦車隊長の受け売りか？しかし、そいつはどういう……」
「今年の大洗には、黒森峰から二人の兄妹が転入して来たらしい。……案外、人の同情をしている暇は、無いかもしれんぞ？」
そう言うとマクギリス（シッキム）は、ガエリオ（ドアーズ）の方を向き、人を食ったような不敵な笑みを浮かべたのだった。

◆

そして、遂に迎えた日曜日。聖グロとの親善試合当日。
予想通り目覚めていなかった麻子を家まで戦車で迎えに上がり、本土の大洗までやって来た。
本土の商店街には今回の親善試合の事が大々的に取り上げられ、まるで祭りのような盛り上がりを見せていた。
しかしそれも当然と言えば当然だろう。何しろ、何十年も前に廃れた大洗の戦車道が、いきなり復活したのだから。否が応でも盛り上がるし、客足も数多かった。アウトレットには見学席も設けられている。
そんな大勢の人々に見守られながら、いよいよ大洗隊聖グロの試合が、始まろうとしていた。

「　　ねぇねぇ、あそこの金髪の人、スッゴイイケメンじゃない?」
「　　確かに……日本人では無いみたいですが……」
「　　はぁ〜、あんな人が彼氏だったらなぁ」

そう言って沙織が熱を上げているのは、彼女の視線の先にいる金髪の聖グロ生徒――マクギリスこと、シッキムだった。

「――君が、大洗の隊長かな？私の名は、マクギリス（シッキ）・ファリド（ムー）だ。今回の試合、楽しみにしているよ」

「オルガ・イツカ。モビルワーカー隊の隊長だ。こちらこそ、わざわざ試合に応じてくれて感謝する」

挨拶をし、握手を交わす二人。

すると、隣に控えていた同じ金髪の女子――聖グロの戦車隊長、ダージリンが、笑いを堪えるように口元を押さえた。

「それにしても、個性的な戦車ですわね」

「むっ……」

まるで小馬鹿にするような言い草に、河嶋がムッとした表情になる。

「ですが……私達はどんな相手にも全力を尽くしますの。サンダースやプラウダのような下品な戦い方は致しませんわ。騎士道精神でお互い頑張りましょう」

そう言い括ると、大洗と聖グロ、両者の間に立っていた審判が、開始の合図をした。

「それではこれより、聖（セント）グロリアーナ学院対、大洗学園の試合を始める。一同、礼！」

その合図とともに礼を交わし、それぞれのチームが己が戦車に乗り込もうとする。
するとその途中、みほがオルガに話しかけた。
「……それで、どうする? 相手は聖グロだし、もしかすると……」
「……まあまだ分からないが、一先ず向こうの出方を見るしかねえな。それに、いざって時にはアレを使う」
「っ、アレ、使えるの?」
「ああ。おやっさんや自動車部のみんなに協力してもらってな。一応登録したが……果たして使うことになるのやら」
「おいオルガ! 早く乗れよ!」
「ああ、分かった!」
ユージンから催促を受けたオルガは、すぐさま自身の乗機に乗り込む。みほもⅣ号へと乗り、規定の位置へと着いた。
今回は戦車が5両、モビルワーカーが5両まで投入可能な殲滅戦のルールだ。しかし、大洗側は戦車の数は同じものの、モビルワーカーは4両しか無い。既に10対9と、数の上で一つとは言え不利な状況であった。
それぞれのチームが、車内で緊張の面持ちになり試合の開始を待つ。
みほも目を閉じて、試合が始まるのを静かに待っていた。すると、その時。

『用意はいいか？隊長』
「あっ、はい」
通信機から、河嶋の声が聞こえて来た。
『全ては貴様に掛かっている。頼んだぞ』
「……はい」
その言葉の重圧に悩みながらも、みほは返事を返した。
するとまた別の声が、通信機から聞こえてくる。
『……あんまり気を詰めんなよ、みほ』
「オルガ」
『ここはもう、あの時とは違うんだ。……遠慮するこたぁねぇ』
「っ……うん」
そのオルガ（義兄）の言葉に、幾ばくか気持ちが和らいだ。
そしてその通信が終わるのを見計らったように、フィールドに声が響いた。
『試合、開始！』
その声と共に、全ての車両が前へと進み出したのだった。

第伍話　隊長、頑張ります！

遂に始まった聖グロと大洗の試合。

殲滅戦が適応されるこの試合は、どちらかが全滅した時点で負けになる。

現在はＡチームのⅣ号と、ＦチームのＴＫ―５３オルガ機が偵察に向かい、他チームはスタート地点から１００ｍほど離れたポイントに待機している。

作戦名は、みほ命名『こそこそ作戦』。……名称に少し突っ込みたい気持ちを、オルガは抑えた。

聖グロの戦車の動きを、山岳地帯からみほとオルガが見つめていた。向こうの戦車隊、モビルワーカー隊は隊列を崩さず、優雅さすら感じる並びで前進している。

「戦車隊、マチルダⅡ四両、チャーチル一両。前進中…。モビルワーカー隊は、ＮＫ―１７五両が戦車隊の前を横列で前進」

「流石聖グロ。統率の取れた動きだな」

聖グロの綺麗な行軍に、オルガが感心したように言う。全機のスピードを合わせて、隊列を乱さずに動くというのはかなり難しい。テクニックもそうだが、チーム間の連携や距離の測り方など、細かな要素をクリアしなければ、あそこまでの隊列を維持するの

は不可能に近い。それを目の前でやってのけている聖グロの技量の高さに、二人は思わず舌を巻いた。
「うん。あれだけ速度を合わせて、隊列を乱さないで動くなんて凄い」
「どうする？あの固い守りは、正面からじゃ抜けねえだろ」
「……そこは戦術と腕かな」
　みほの少し頼りない、しかし確信が持てるその言葉に、オルガは不敵に笑った。通信機を取り出し、各車に伝達する。
「まあな。……お前ら、準備しろ！」
『了解！』

◆

　敵の誘い込みに成功したみほ達は、敵からの追撃をかわしながら合流ポイントへと走行していた。
「なるべくジグザグに走行してください。こっちは装甲が遅いから、まともに喰らったら終わりです」
「……了解」

「ユージン、無理はすんなよ!向こうの方が火力は上だ」
「んなの、言われなくったって!」
　敵のチャーチルやマチルダ、ＮＫ―１７の砲撃を躱し、土煙を立てながら二機が山岳の間を走り抜けていく。時々機体のバランスが崩れそうになるが、そこは技量でカバーだ。特にＴＫ―５３はモビルワーカーの強みである機動性能に物を言わせて、砲撃を避けていた。

「……思ったよりやるわね。速度を上げて。追うわよ」
『こちらの手助けは、必要かな?』
「いいえ、まだ待機していて頂戴。我が校の戦車は、どんな走りをしようとも、一滴たりとも紅茶を零したりしないわ」
『……それが聞けたなら安心だ。健闘を祈る』

「みほっ!!」
「……っ!」
　チャーチルから放たれた砲弾が、Ⅳ号の側面スレスレに着弾する。もし一秒反応が遅れていたら、確実に今ので葬られていただろう。みほは安堵の吐息を一つ漏らす。

「みぽりんにイツカくん、危ないって！」
「へ？」
「あん？」
　すると、Ⅳ号から沙織が顔を出して、二人に注意をした。
「ああ、戦車やモビルワーカーの車内は、カーボンやナノラミネート装甲材でコーティングがされてるから大丈夫だよ」
　戦車道で使用される戦車やモビルワーカー、そしてモビルスーツには原則として、乗組員が乗る内部に、高硬度レアアロイ等を混ぜ込んだ特殊カーボンや、ナノラミネート装甲材を用いた特殊なコーティングを施すことが義務付けられている。そうしなければ、操縦者達の命と安全が保障されないからだ。今や競技用になったとは言え、戦車やモビルワーカー、モビルスーツは元は完全なる兵器。競技者の安全を保障しなければ、そもそも競技として成り立たない。
　だが沙織の心配は、別のところにあるようだった。
「そうじゃなくて！そんなに身を乗り出して当たったらどうするの!?」
　そう。みほとオルガは試合開始から、ずっとキューポラやハッチから身を乗り出して指示を出している。どうやら沙織はそれがとても危険なものに思えたのだろう。
「まあ、滅多に当たるものじゃないし」

「それにこうしてた方が、状況も分かりやすいからな」
「でも二人にもしものことがあったら大変でしょ!もっと中に入って!」
あくまでも友人を気遣うその心遣いに、二人は苦笑しつつも感謝した。こういう風に心配してくれるのは、随分と久しぶりな気がした。
「じゃあ、お言葉に甘えて」
みほがそう言うと、二人はほんの少し、身体を中に入れた。

◆

オルガ達を待っていた他チームの面々は、合流ポイントの高台で敵を迎え撃つ準備をしていた。
しかし、メンバーの殆どはトランプに興じていたり、バレーをしていたりと気が緩んでおり、とても試合の雰囲気ではなかった。
そんな中で、男子勢のモビルワーカー隊はハッチから、退屈げに身を乗り出していた。
「オルガ達遅っせぇなぁ〜」
「待つのも作戦だ」
「いつ敵が来るかも分からないから、ちゃんと待ってないと」

「分かってるけどよ～」
シノはぼやき、昭弘は静かに腕を組んで待っている。三日月は火星ヤシを口にしながら、前方を静かに見据えていた。
その時、モビルワーカーに備え付けられたＬＣＳ通信機から、通信が入る。
『全員聞こえるか！今Ａチームと一緒に、敵を引きつけつつ待機地点に前進中！あと三分で到着する！』
「……来た」
「Ａチーム達が戻って来たぞ！全員乗り込めぇっ！」
耳元の通信機からも通信を受け取っていた河嶋が、全員に指示を出す。
三日月は操縦桿を握り込むと、いつでも撃てるように構えた。
『あと６００メートルで、敵車両射程内です！』
みほからのＬＣＳ通信に、全員の緊張が高まる。
そして、Ⅳ号とＴＫ―５３が戻り、あとは敵車両を――――
「撃て撃てェッ!!」
――――撃つ前に、Ⅳ号とＴＫ―５３を敵と誤認したのか、河島の指示で味方から

の砲撃が飛んできた。
「あ、待ってください!」
「おいお前ら!何やってんだ!!」
「味方を撃ってどうすんのよーっ!」
彼らからの非難で味方と確認したのか、砲撃が鳴り止む。
みほ達が味方と合流し、改めて聖グロを迎え撃つ準備をする。

「こんな安直な囮作戦、私達には通用しませんわ」

「撃てッ!」
改めて、大洗チームの砲撃が聖グロ戦車へと降り注ぐ。
が、それらはどれも的外れな方向へとバラバラに飛んでいき、当たる事がなかった。
そしてお返しとばかりに、敵からも砲撃が飛んでくる。
「撃て撃て撃てぇっ!」
「そんなバラバラに攻撃しては……履帯を狙ってください!」
「Cチーム、もう少し耐えてくれ!Dチーム突っ込み甘い!当たり負けるぞ!ユージン、こっちも撃ち返せ!」

「それはいいけどよ、このままじゃジリ貧だぜ……！」
ユージンの言う通り、当初立てた囮作戦は最早意味が無くなっている。弾道は的外れな方向に飛び、今やこちらが追い詰められている状態だ。作戦から技能まで、全てあちらの方が有能であったが故の状況だった。
「もっと撃てぇ！次々撃てぇっ！見えるものは全て撃てぇっ!!」
「くっそあいつら、容赦無しかよ、ボカスカ撃ちやがって！」
敵の止むことのない報復に、三日月と共に応戦していたシノが毒づく。事実、戦車やモビルワーカーと性能に、搭乗者の技量もあちらの方が上だ。こちらが一発撃てば、向こうからは二、三発飛んでくるような状態と化していた。
「どういうつもりか知らねえが、このまま俺らを塩漬けってか!?」
「いや……来る」
シノの隣で応戦していた三日月が、直感から呟く。
「――――全車両、前進」
ダージリンが出した号令とともに、敵戦車やモビルワーカーが一斉に行軍を開始する。

「――――――攻撃」

次いで向こうから、更なる砲撃の雨が降り注ぐ。先ほどまでのが前座だと言わんばかりの猛攻に、大洗チームは逃げ回る他なかった。

「凄いアタック！」

「ありえない！」

『落ち着いてください！砲撃やめないで！』

逃げ回る車両に、みほからの指示が飛ぶ。

「無理です！」

「もういやぁ～！」

「来るぞ！着弾集めて……あん？コラ！何やってるお前らっ！」

すると応戦していたシノが、戦車から降りて逃げ出す一年のＤチームの姿を見た。すぐに怒鳴るが、もう遅い。敵戦車の放った砲弾が、Ｍ３の車体に直撃。大洗チームから、試合始まって最初の白旗が上がってしまった。

さらに地面に直撃した砲弾の衝撃で、生徒会チームの３８（ｔ）の履帯が外れてバランスを崩し、後方へと滑り落ちていった。

「武部さん、各車状況を確認してください」

「あ、うん！」

みほ達Ａチームは、ＬＣＳ通信から各車の状況を確認する。既に作戦は失敗し、被害も少なくない。さらには立地の悪い岩場ときた。ここから立て直すのはかなり困難な事だ。

戦車隊Ｂチーム、Ｃチーム、モビルワーカーＦ隊は全機が健在。

Ｄチームからは応答無し、Ｅチームは履帯が外れ継続戦闘が困難。

最早この場で応戦したところで、全滅するのも時間の問題なのは誰の目から見ても明らかだった。

『おいおいどうすんだよ！俺らこのままじゃ犬死かよぉっ!!』

オルガ達が乗り込むモビルワーカーの操縦席から、ユージンの弱々しい声が聞こえる。だがそれを、オルガは否定した。
「いいや違うな。それじゃあ筋が通らねえ。……なあ?みほ」
オルガの問いかけに、みほが頷く。既にみほの頭には、この状況を打開できるかもしれない作戦が浮かびつつあった。
「B、C、Fチーム全機、私たちの後について来てください!移動します!」
『わかりました!』『心得た!』『分かった』『了解した!』『了解!』
『何い?許さんぞぉっ!』
Eチームの河嶋から抗議の声が上がるが、全員無視した。今この状況で信頼できるのは、みほだ。
「『もっとこそこそ作戦』を開始します!」
「さぁ――――反撃開始と行こうかぁっ!」

◆

あの岩山から抜けたみほ達は、敵の追撃を躱しつつ、市街地方面へと向かっていた。

「これより市街地に入ります！地形を最大限に活かしてください！」
『Ｗｈｙ　ｎｏｔ！』『大洗は庭です！任せてください！』
「モビルワーカー隊Ｆチームは俺たちに続け！敵のモビルワーカー隊を引き付けるぞ！」
『『『おう！（分かった）』』』
みほとオルガの指示に倣い、戦車隊とモビルワーカー隊が分かれる。やがて各車もバラけると、みほの言う『地形を活かす』為に、各々行動を開始した。

「……消えた？」

先程までの轟音とは打って変わった静かな市街地の光景に、聖グロ隊が警戒しつつ前進する。市街地に入ると、全機がバラけて行軍を続けていく。
その内の戦車隊の一機は、のぼり旗が立ち並ぶ一帯をゆっくりと行軍していた。周囲を警戒し、『誠』という字と、六文銭が印刷された赤青の旗が立った辺りを通過したところで――――――

――――――ズドオオオオオオッ!!

轟音が、鳴り響いた。
のぼり旗の奥には、ド派手な赤色に染まった、大洗のⅢ突が砲口から硝煙を上げて、待ち構えていた。
「――――そーれッ！」
『そーれっ！』
一方でBチームの89式も、タワーパーキングを使った待ち伏せ戦法で以って、マチルダを一両撃破に成功していた。
地形を活かす――――それはこの大洗の地に慣れていた、大洗学園生徒だからこそ取れた戦法であった。向こうの聖グロはこちらの地形を把握できていない。故にこういった奇襲戦法は、地の利があるこちらが優位に建つことができるのだ。
「こちらCチーム、一両撃破！」
「Bチーム、一両撃破っ！」
そしてそれは、モビルワーカー隊にとっても同じ事だった。

◆

『くそっ、なんなんだよこいつらっ！』

三機に固まって行動していたモビルワーカー隊の一部は、市街地の中でも比較的開けた場所へと進軍していた。三方向を固めた状態なら、戦車でも相手にできると思っていたのだ。同じモビルワーカーでも、こちらは優秀な性能を誇るＮＫ―１７。対して向こうは、型落ちも良いところの旧型期、ＴＫ―５３である。基本性能は勿論、火力も機動性も、本来は聖グロが優位に立てるはずであった。

だが――――

『やっとこの阿頼耶識ってＯＳに慣れて来た。昭弘、そっち大丈夫？』

『へっ、お前にばっかり、いいカッコさせるかよっ！』

『おのれ！こんな筈では……っ！』

『なんなんだあのＴＫ！出鱈目な動き過ぎるっ！』

『っ、後ろっ!!』

結果は、大洗のモビルワーカー二機が優位に立っていた。まるで滑り込むように聖グ

ロ側の死角を付いては、すかさず連射を叩き込んでくる。今も背後を取られた一機が、白旗判定のダメージを食らっていた。

「よし！ミカと昭弘が食い付いた！混戦ならあいつらに勝てるのはそうはいねえ。阿頼耶識使いの本領発揮ってとこだ」

その様子を見たオルガが、したり顔で言う。

阿頼耶識のＯＳ搭載機は、今のような混戦でその真価を発揮する。パイロットの意思によって動かすことのできる阿頼耶識は、ＡＩ補助の回避パターンに依存している現行のシステムにこの点で優位を取っているのだ。現に数日前、同じような状況下での戦闘訓練を行った際、最も戦績が良かったのはあの二人だ。

『オルガ。こっちは片付けたよ』

『隊長！こっちも一機仕留めたぜ！』

三日月とシノからの通信が入ってくる。どうやら別行動をしていたシノも、敵モビルワーカーを一機仕留めたようだった。

先ほどまでの防戦からは一転。今や大洗が、聖グロを追い詰めつつあった。

『攻撃受け、走行不能！』

『こちら被弾につき現在確認中！』

『モビルワーカー隊、ルクリリ機を残して壊滅！』

「な……っ!?」

報告を受けたダージリンは、その衝撃に手から紅茶を滑らせた。チャーチルの車内に、カップの割れる音が響く。

格下と侮っていた大洗の予想外の反撃に、モビルワーカー隊の壊滅という報告。

一瞬優雅さを忘れてしまうほどに、ダージリンは驚きを隠しきれなかった。何とか冷静さを取り戻し、通信機へと手をかける。

「……おやりになるわね。でもここまでよ。……出番よ、マクギリス（シッキム）」

◆

「……その意味が分からぬほど、子供ではあるまい」

ダージリンからの通信を受け取ったマクギリス（シッキム）は、待機状態にしていた愛機を起動させた。眼前のモニターに、複雑な文字列が羅列される。

これらを起動させると言う事は、聖グロにとっては完全なる勝利を。そして大洗にとっては――――避け得ぬ敗北を意味する。その彼女の容赦のなさに、マクギリス（シッキム）は半ば

呆れたような表情と声音になる。
するとその真意を見透かしたように、ダージリンが変わらぬ声音で続けた。
『――――こんな格言を知ってる?イギリス人は恋愛と戦争では……手段を選ばない』
「君は日本人だろうに。全く……困った女だ」
セリフとは裏腹に、困ったような、それでいてどこか楽しげな表情を浮かばせながら、操縦桿を握りしめる。
モニターには何かの紋章と、【ＧＵＮＤＡＭ　ＦＲＡＭＥ　ＴＹＰＥ　ＢＡＥＬ　ＡＳＷ―Ｇ―０１】という番号が映し出されていた。

◆

「はっはっはっは!!」
敵戦車を一機撃破したＣチームのカエサルとエルヴィンは、高笑いをあげながら戦車から身を乗り出し、走行していた。
「入り組んだ道に入れ。Ⅲ突は車高が低いから、道に入れば……」
と、エルヴィンが指示を出したその時。

ビー！ビー！ビー！ビー！ビー！

「ん？なんぜよ、この警報」

車内に、聞いたことのない警報が鳴り響く。そして彼女らは、気づいていなかった。

ドッッッゴオオオオオオオオオオオオオッ!!

「うおわぁっ!?な、なんだぁっ!?」

「せ、戦車の砲撃にしては、デカすぎる気が……ッ!?」

「ん？どうし……た……ッ!?」

向こうから自分たちを見据える、巨人が立っていたことに。

全高は８～９ｍ程だろうか。両手にライフルとアックスを持ち、緑色の装甲に身を包んでいる。

そしてその巨人は顔の向きを変えると、頭部を開き、一つ目のようなセンサーを剥き出しにした。

狙った先は――

「……へ？」

「……な、なに、アレ……」

――Ｂチームの、８９式だった。

◆

『Ｃチーム、走行不能！』

『Ｂチーム、走行不能！すいません！』

「っ！」

Ｂ、Ｃチームから聞こえて来た報告に、みほが表情を厳しくする。

――ビー！ビー！ビー！ビー！

そして、さらに聞こえて来た音に、みほはいよいよ警戒を強めた。

「み、みほ！この警報って何!?」
「……まさか、エイハブ・ウェーブ……っ!?」
「えいは……何それっ!?」
「エイハブ・リアクターから発せられる磁力波です！これが鳴ったってことは……」
「うん……オルガっ!!」
みほは急いでＬＣＳ通信機を取り出すと、オルガの元へと連絡を繋いだ。
エイハブ・ウェーブ。
これの発生を知らせる警報が鳴ったということは、近くに稼働中のエイハブ・リアクターがあるという事であり、そしてそれは、ある存在――――今の大洗にとって、絶望としか言いようのない存在が現れたことの証明でもあった。

◆

そしてオルガ達もまた、危機に立たされていた。
先の巨大な砲撃音は、オルガ達の耳にも届いていたのである。
『今のって、重砲……っ!?どっから……!?』
ユージンの戸惑いの声とともに、地面に衝撃が走る。それは戦車の自走の衝撃や、砲

弾の衝撃などとは物が違う、凄まじい衝撃だった。
「こいつは……っ!」
オルガが前方を見上げると、そこにヤツはいた。
緑の装甲に身を包んだ、鉄の巨人。
戦車道に於いて最大戦力とされる、最強の兵器。
「モビルスーツだとぉッ!?」
人型戦車モビルスーツ[M S]、その代表的機体であるＥＢ―０６　グレイズに、他ならなかった。
「み、みほっ!?あれってもしかして、モビルスーツってやつ!?」
「まさか、本当に来るなんて……っ!!」
大洗戦車隊で唯一残った、みほ達Ａチームも混乱に包まれていた。
突如戦局を、まるでちゃぶ台返しのようにひっくり返した目の前の存在に、一同が戸惑いを隠しきれなかったからだ。
人型戦車、モビルスーツ。

それはその名が示す通り、人の形を模した機動兵器である。人類史の果てなき戦争の歴史の中で開発されたと言われ、今では戦車道を構成する要素の一つである。先程発生したエイハブ・ウェーブは、このモビルスーツの動力炉たるエイハブ・リアクターから発せられたものであったのだ。

しかし今の大洗にとって、その登場はあまりにも部が悪すぎた。

『騎士道精神で頑張りましょう』、か……あの隊長さん、とんだ二枚舌じゃねえか」

試合開始前に言われたセリフを思い出し、オルガが毒づく。

モビルスーツは、全高が最低でも7mを超える大型だ。人型戦車という名称も、戦車道へと吸収された際に半ば強引に付けられた名に過ぎない。

そう。戦車やモビルワーカーとモビルスーツでは、戦力があまりにも違いすぎる。性能や火力、機動性は言うに及ばず、防御性や全ての性能が戦車とは根本的に違う。端的に言ってしまえば、相手にすらならないのだ。

戦車の主砲も、モビルスーツの装甲材である特殊装甲、【ナノラミネートアーマー】によって殆ど意味をなさない。よしんばウィークポイントを突いて攻撃できたとしても、かすり傷程度しか与えることができないのだ。

そしてそんな物を見せられて、彼らの間に絶望が伝わるには一瞬で十分だった。

「嘘だろ……モビルスーツなんて勝てる訳ねえ」

「どうすんだよあんなの……!」
「逃げよ逃げよ!あんなの無理だって!」
「どこに!?」
仲間に混乱が伝播していく。無理もない。ここまで追い詰めたというのに、モビルスーツが一機登場しただけで、全ての戦局がひっくり返されんとしているのだから。
「……そうだ」
しかしそれを破るように、オルガが立ち上がって声を出した。
「どこにも逃げ場なんて無えぞ。ハナっからな……なぁ?ミカ」
そうして顔を向けた先には、待っていたかのように三日月の姿があった。頷き、オルガの方を見る。
「うん。……で、次はどうすればいい?オルガ」
三日月からの問いかけ。
――脳裏に浮かぶのは、学園館の地下に眠っていた――
「……へっ」
それを思い浮かべると、オルガはこの状況下で、不敵な笑みを浮かべたのだった。

◆

『無理はするな！ミカが戻るまで少し時間が稼げりゃいいんだ！』
オルガから通信が入る。しかし、それでもなお全員の不安の色は隠せなかった。
「そんな事言ったってぇ!?」
「に、西住殿！どうすれば……」
「……とにかく、敵の視界から振り切りましょう。麻子さん、お願いします」
「……ん」
麻子はみほに軽く返事すると、すっかり慣れた操作で車体を動かした。後方を確認すると、まだグレイズはこちらを認識できていないようだ。
続けて、オルガからの通信が飛んでくる。
『――――そしたらよ、このクソッタレな状況に、一発かましてやれるんだ！だからそれまで……！』
しかしその通信を遮るように、グレイズからの重砲は止まない。８５ｍｍの銃弾が、街の建物の一つに被弾した。

「うちの店がぁ!!……これで新築出来るぅっ!!」
「縁起いいなぁ」
「うちにも当たんねえかなぁ」

防戦は続く。グレイズからの絶え間ない攻撃は、着実に大洗の行動範囲を狭めて来ていた。そもそも上から攻撃できる時点で、向こうにアドバンテージがある。それに痺れを切らしたのか、ピンク色のモビルワーカー――――――シノの流星号が、グレイズに飛び出していった。
「……くそがぁっ！無抵抗でやられっかよぉっ!!」
「っ、おいシノ！待て！」
オルガが制止するも、手遅れだった。機銃を乱射しながら突撃するが、グレイズは傷一つない様子で、シノ機を軽く蹴飛ばした。たったそれだけの攻撃で、シノのモビルワーカーから白旗が上がった。
「シノォッ!!」
『チックショウ！どうすりゃいいんだよ！』
シノの撃破により、こちらの残存車輌は三機。いつまで持ちこたえられるか。
「！落ち着いて！落ち着いて攻撃を続けてください！ミカさんが来るまで……！」

だが。
「　っ、み、みほ！なんかこっち見てるっ！」
向こうを見た沙織が、グレイズの方を指差した。するとグレイズの顔はこちらに向いており、センサーを剥き出しにしてこちらへ狙いを見定めていた。
『　　貴様が、指揮をしているのか？』
オープン回線でグレイズのパイロットが口を開く。次の瞬間に、グレイズがスラスターを吹かして迫って来た。
「っ、麻子さん！」
「……分かってる……っ！」
流石の麻子も焦った様子で、アクセルを踏み込み全力で逃げる。
しかし、相手とのスピード差は歴然。さらには銃撃を放ち、こちらの逃げる範囲を狭めてくる。どうしたって、このままではやられてしまう。
「っ、無理無理無理いっ!!」
「このまま、終わってしまうのでしょうか……っ？」
『終わらねえッ!!』
　　だがその横を、オルガのモビルワーカーが駆け抜ける。

そして通信から、オルガの激励が聞こえて来た。
『終わってたまるか!そうだろ、みほっ!』
「…っ!……そう、だね……このままじゃ……!」
オルガの言葉に続くように、みほが力強く言う。
そうだ。まだ、終われない。

『こんなところじゃ――――――』

「――――――終われませんッ!!」

だが、二機ともこれ以上は進めない。ここから先は行き止まりだ。
だからこそ、グレイズへと向かい合うように停止する。
誰がどう見ようとも、絶対的危機だ。
だが二人には、強い確信があった。

『――ハッハハァッ!!』

「だろ……？」「お願い……！」

――彼が、来てくれると！

「ミカァッ!!」「ミカさんッ!!」

――瞬間。

爆音とともに、土煙をまとってソレは現れた。
二本の角に、力強い佇まい。巨大なメイスを両手に持って、大きく振りかぶる。
そして大地に力強く踏み出すと、グレイズ目掛けて手にしたメイスを、渾身の力で叩きつけた。
さながら、大地から蘇った悪魔のように。

「……ッ!!」

――オル、ガ……

――――――俺、達で……

――――――鉄華団、を……

思い出すのは、かつての記憶。
今も胸の中にある、消えず褪せない忌まわしい記憶。
だが今、目の前に立ったその悪魔は、相棒は。そんな不安をかき消すかのような、無敵の頼もしさがあった。

「……こいつと、一緒なら」

メイスを白旗が上がったグレイズから引き抜き、再び大地へと立つ。

その中で、少年――――――三日月・オーガスは、静かに微笑んだ。

「――――――行こう。俺たち、みんなで」

―――――ＡＳＷ―Ｇ―０８　ガンダム・バルバトス。

かつて厄災を終わらせた機械仕掛けの悪魔が、降臨した瞬間であった。

第陸話　バルバトス、行きます!

時は、バルバトスが現れる少し前に遡る。
三日月は一時戦線を離脱すると、戦場のかなり後方の方まで足を踏み入れていた。
「おーい、来たよー」
「あ、三日月!」
「おお、待ってたよー!」
モビルワーカーで来た三日月を待っていたのは、三日月と同じく一年の自動車部員、タカキ・ウノと、三年の自動車部員、ナカジマだった。
さらに彼らの前には、足を曲げて座している白いモビルスーツ、バルバトスの姿がある。近くには他自動車部員の姿も見受けられ、忙しなく作業に取り掛かっている。
そして三日月が乗って来たモビルワーカーを展開すると、シート部分を外す作業へと入った。
「これ、どうするんですか?」
「これは元々、昔の大洗が戦車道に使ってたやつらしくてねー。コクピット周りのＯＳも、使えなくなっちゃって。だからこれのＯＳを、流用する」

「モビルワーカーのシステムで動くの？」
「うん。システム自体は元々あったやつを使うから。欲しいのは阿頼耶識の方だね。ほら、一応目を通しておいて」
「うん」
　ナカジマからデータを纏めた端末を手渡され、一通り目を通す。
　バルバトスの操作方法や、今ある武装のデータなど、今欲しい機体情報を可能な限り纏めたものだ。詳細な機体スペックなんかは後で調べればいいだけだろう。
「でも、いきなりこんなものを投入しても大丈夫なの？登録を出してない機体の途中参加は、レギュレーション違反だったはずだけど」
「いや、その辺は大丈夫。試合に使うかもしれないって、オルガくんが登録を出してたらしいから。……よーし、クレーン上げてー」
　シートの分解が完了したナカジマが、待機していたタカキに呼びかける。クレーン車が稼働し、シートをバルバトスのコクピット部へと運ぶ。内部にかっちりハマると、すぐに固定作業へと入る。
　それを見ていた三日月に、ナカジマが警告するように告げた。
「三日月くん、いくら競技用と言っても、モビルスーツの操縦はモビルワーカーのそれの比較にならない。もしかしたら、怪我する事だって……」

「大丈夫。少なくとも授業で支障がないんなら、怪我くらい」
「そんな気楽な……」
　三日月のあっけらかんとした返事に、呆れたような声音を漏らす。すると上で作業していた、同じく一年の自動車部員、ヤマギ・ギルマトンとがナカジマに呼び掛ける。
「取り付け完了しましたー!」
「分かったー! 行くよー、三日月くん」
「うん」
　二人の報告と共に、三日月はナカジマと共にコクピットへと向かう。報告通り既にシートが取り付けられ、上部にはしっかり阿頼耶識の脳波センサーが搭載されている。
　もたつく暇など無いように、三日月はシートに座り込むと、前面のパネルを操作し、システムを立ち上げた。
「えーっと……ガンダムフレームタイプ……バルバトス? かな」
　前面のパネルには何かの紋章らしき絵柄と、【ＡＳＷ―Ｇ―０８　ＧＵＮＤＡＭ　ＦＬＡＭＥ　ＴＹＰＥ　ＢＡＲＢＡＴＯＳ】という文字列が表示された。続けて、モビルスーツ本体の起動コードが羅列されていく。
　ブートスキャンが完了すると、再びパネルを操作し、操作を続ける。
「……三日月くん、行けそう?」

「うん。だから急ごう」
「分かった……行けるって！ヤマギ、タカキ！リフトアップ！」
そう言うとコクピットのハッチが閉じ、薄暗いコクピット内部へと吸い込まれるように入っていく。
様々な機器を搭載したコクピット内部は、人一人入ったらすぐに狭く感じてしまった。シート上部の阿頼耶識脳波センサーや、外を見回すためのモニター。左右の肘掛けの部分に、複数のボタンが取り付けられた操縦桿があり、下にはスラスター制御や移動、ブレーキの役割を持つペダルが設置されている。
三日月は先ほど見た操作方法を思い出しながら、操縦桿を握りしめた。
「――――網膜投影、スタート」
その声と共に、コクピット天井部に取り付けられた投影機から、パイロットに外部の視覚情報が直接網膜へと投影される。眼前に広がる映像が、一気に拡大したのを感じた。
「――――行くぞ。バルバトス！」
三日月の、その声に呼応するように。

白き機械仕掛けの悪魔（ガンダム・バルバトス）は、その双眸を輝かせ、目覚めたのだった。

◆

そして、時は戻る。

みほ達を守るように地から現れたバルバトスは、その振り下ろしたメイスで以って、敵のグレイズを地面へと叩きつけていた。メイスを叩きつけられた装甲がひしゃげ、胸部中央からは白旗が上がっている。

「――――マジかよ！本当にやっちまった！」

「あれに三日月が……」

「乗ってるっていうのか……っ？」

「あれ味方、だよね……？」

そのバルバトスの姿を見た一同から、驚愕の声が上がる。

「すっごぉ……」

「……凄い、凄いです！あの二基のリアクターに、凛々しい佇まい、間違いありません！本物の、本物のガンダム・フレームですよぉ!!」

「がんだむ、ふれーむ……？」

「……三日月……」

特にⅣ号戦車から身を乗り出し、優花里が興奮と悦びに満ちた笑みを浮かべてバルバトスを見上げる。

沙織や華、麻子も大小の差はあれど、突如現れたバルバトスの姿に驚きを隠せないようだった。みほとオルガも、安堵の笑みを浮かべて見上げる。

とにかく今は、観客選手問わず、この試合を見ていた殆どの人間が、地から現れた白い悪魔の姿に魅入っていた。

そしてそれは、敵もまた同様だった。

『申し訳ありません隊長！やられました！』

『そんな馬鹿な！大洗がモビルスーツを持っていただと!?』

『あんな機体があったなんて、私のデータベースに載っていません……！』

『グレイズを一撃で……』

『……まさか、ガンダムフレームだとでも言うのか……？』

聖グロのメンバー内でも、戦車隊やモビルスーツ隊問わずに混乱が広がる。

それも当然だろう。まさか発足したての大洗戦車部が、モビルスーツという代物を引っさげて来たのだから。

人型戦車たるモビルスーツは、購入するのに戦車の何倍もの予算がかかる。さらには戦車のみでの撃破がほぼ不可能という点も相まって、フラッグ車への指定もできない事から、戦車道にモビルスーツが導入されて以降も数を揃えている学校は少なく、一部の大会常連の強豪校などに絞られる。弱小校では一、二機持っていたら充分という所すらある有様だ。

そんな事情の中で、今回の試合が初陣となる大洗が、一機だけとは言えモビルスーツを登場させて来た。戦車とモビルワーカーのみの編成を予想して来た聖グロからすれば、肝を潰されたような衝撃だろう。

しかしそんな中でも、すぐに動いた者がいた。後方で待機していた、聖グロの三機編成のモビルスーツ隊のうちの一機である。

グレイズに似ているが、頭部パーツや細かな装飾や、背面に取り付けられた高出力スラスター、何よりも目を引く紫色の装甲が特徴的な機体である。

『ふん、あんなの、ただの虚仮威(こけおど)しだ!』

その機体、シュバルベ・グレイズに乗り込む、ガエリオ・ボード(ア)ウィン(ズ)が、スラスターを噴かせてバルバトスへと向かっていった。

自分たちへと迫って来たシュバルベを見て、大洗の間にまた緊張が走る。

「うぇっ!?また来たぁっ!?」

『オルガ、みんなを下げてくれ！』
「分かった！」
　三日月からの指示で、オルガが残存車輌を後方への下げさせる。そして三日月は反対に敵シュバルベへと向かって、スラスターを噴かせた。
『どこから持って来たのか知らんが、そんなオンボロの機体で何が出来る！』
『ガエリオ、落ち着け。私が来るまで――――』
『大丈夫だ。お前の手を煩わさずとも、こんな奴！』
マクギリス（シッキム）からの通信に答えながら、ランスユニット上部に内蔵された短砲を構える。ともすれば油断しきっているようにしか見えないが、しかし彼の態度も理解できなくはなかった。
　何しろ突然現れたモビルスーツ、バルバトスは、関節のフレームはガタガタ、各部の装甲も傷だらけ、塗装ハゲも多々ある。さらには彼らからは見えないが、細かなところには砂や塵が堆積して、細かな動作を妨げている。さらに言えば、武器は手に持った取り回しずらそうなメイスが一本のみ。五体満足に動けているとは言え、その姿は控えめに言ってスクラップにも見えるほどのオンボロな機体だったのだ。
　しかしそんな油断を突くように、敵は予想外の行動をした。
『なっ!?』

なんと手にした得物であるメイスを、槍投げの要領でシュバルベへと投擲したのだ。
驚愕するも、その程度でやられる程ガエリオは甘くない。すぐさまランスユニットを上段に振り抜き、メイスを上へ弾き飛ばした。
『武器を投げるなど……なっ!?』
しかしその後、再びガエリオの表情は驚愕に染まった。先程まで前方に居たはずの機体が、消え失せていたのである。立て続けに起こった想定外の事象に、ガエリオも焦って冷静さを欠いてしまう。
『奴はどこだ……っ!』
『上だ!』
『何っ!』
前方を索敵していると、マクギリスからの通信が入る。つられて上空を見ると、そこには先程投げ飛ばしたメイスを持って、シュバルベの上に大きく飛び上がっていたバルバトスの姿があった。
手にしたメイスを大きく振り下ろし、シュバルベの頭部センサーに攻撃を直撃させる。一瞬の出来事にガエリオも対応しきれず、攻撃を許してしまうのだった。
『ぐあっ……!くそっ……!』
『ガエリオ、下がれ』

『っ！』

そこに、再び友人の、マクギリス（シッキム）からの通信が入る。さらに集音器が、前方からのスラスターの噴射音を拾っていた。

頭部センサーをやられてしまい、今のシュバルベは目が効かない。口惜しいが、ここは撤退するのが懸命だ。

『くそっ、あとは頼むぞ……マクギリス！』

『無論だ。ガエリオ』

「あれは……」

その突然の来訪は、三日月の目にも入っていた。

まるで天使の如き羽根を広げ、優雅さと気品に溢れた佇まい。白い装甲に身を包み、両手に携えるは黄金の長剣。

そのモビルスーツは聖グロリアーナにとって、特別な意味を持つ機体であった。

『君の相手は――――私がしよう』

ＡＲＷ―Ｇ―０１　ガンダム・バエル。

聖グロリアーナ機動隊隊長、マクギリス（シッキム）・ファリド（ムキ）が乗り込む機体であった。

そしてその姿を見た聖グロの隊員達から、歓喜の声が上がる。

『バエルだ!』『アグニカ・カイエルの魂!』『聖グロリアーナの誇り!!』『穢れなき伝統のモビルスーツ、バエルだ!!』

目に見えて、聖グロ側の士気が上がっていた。それは、単にこの機体が隊長機であるという理由だけではない。

この機体、ガンダム・バエルは、聖グロリアーナ初代隊長、アグニカ・カイエルが乗り込んでいた、何十年にも渡り脈々と受け継がれて来た、聖グロにとって一種の伝説と化している機体なのだ。

『態勢を立て直すわ。大洗の残存車両へ回り込みなさい、至急!マクギリス、そっちは任せたわよ!』

『了解だ。レディ』

「オルガ達はやらせない……っ!」

バエルの姿を捉えたバルバトスが、メイスを構えて突撃する。

大きく振りかぶって叩きつけようとするも、バエルが手にした、特殊超硬合金製の二本の長剣、バエルソードを交差させ、背面のスラスターを噴かせてこれを受け止め、さ

らに後方へと吹き飛ばすように押し退ける。
今のバルバトスのメイス攻撃は力押しとは言え、高い出力を生かした十分な破壊力を持つ一撃だ。その威力の程は、先程撃破されたグレイズのひしゃげた装甲が物語っている。
それを二本の剣で受け止め、あまつさえ弾き返すのは、とてもではないが常人では不可能だ。そこで聖グロの機動隊長たる、マクギリス・ファリドの技量が押して知れた。
「ちっ、だったら……」
跳ね返されたバルバトスはそのまま上空へと飛び上がると、落下の勢いも利用してメイスを叩きつけるように振り下ろした。
しかしバエルは易々とそれを躱し、メイスは虚しく地面へと叩きつけられ、土煙が舞った。
「浅いか……なっ!?」
そして三日月が敵の姿を捉えた時にはもう、バエルはこちらへと翼を広げてすんでのところまで迫って来ていた。
「こいつ、速い……ッ!」
スラスターの青い噴炎を噴かせて、黄金の剣を携えたバエルがバルバトスへと迫る。
ガンダム・フレーム最大の特徴たる、二基のリアクターを並列稼働させるシステム、

【ツインリアクター・システム】に支えられた大出力のスピードを出して、逆手に持ち替えた長剣でバルバトスを刺し貫かんと振り下ろす。

が、ただでやられてやるほど、バルバトスと三日月はやわではない。

一度機体のバランスを後方を傾けると、そのまま全身の各部に設置されたスラスターを噴射させ、半ば強引にバエルから遠ざかる。

『今の躱すか。なんという反応速度……何だ?』

が、そこでマクギリス（シッキム）は眉を潜めた。

後方まで下がったバルバトスの各部のスラスターが、その噴射の勢いを急に殺していったのだ。それはまるで、パイロットが止めたというよりかは――

『……まさか』

「……ガス欠っ!?」

三日月がスラスターの噴射トリガーを押すも、反応が無い。

前方のパネルには、スラスターの燃料切れを伝える【ＯＵＴ　ＯＦ　ＦＵＥＬ】の表示だけが、無慈悲に映し出されていた。

◆

「……あぁーッ!!」
「ん？ナカジマ先輩？」
「どうしたんですか？」
「タカキ、ヤマギ、やばい!!バルバトスのスラスター、ガス補給するの、忘れた……!」
「えぇーーッ!?」
「どうしよう……」
「いやどうしようったって……!」
「もう三日月出ちゃいましたよ!?」
「ヤバイよー!起動するのに一杯一杯で……残ってた分でどれだけ動けるか……!?」

◆

「なるほど、燃料切れか……確かに、半永久機関であるエイハブ・リアクターと違い、推進剤やオイルは消耗品だからな」
　モビルスーツの動力源たる相転移炉、エイハブ・リアクターは、モビルスーツの動力をほぼメンテナンス無しで半永久的に動かすことが出来る。さらには初めて開発された３００年前から、未だに現役で起動している物もあるくらいの頑丈さをも誇る代物

だ。

が、動力以外の、スラスター等も全てそれで動くかと言えば、無論異なる。ちゃんと推進剤を投入しなければ、スラスターを動かすことなど出来ない。

即ち今のバルバトスは、圧倒的に不利な状態へと追い込まれてしまっていた。これがまだ先のグレイズなどであったならどうにか戦えたかもしれない。しかし初戦闘にして、今は相手が悪すぎた。

ガンダム・バエル――――始まりの悪魔の名を冠されたこの機体は、背面のウイング型巨大スラスターによる高機動近接戦闘を主とした機体である。さらにそこへ現聖グロ一のモビルスーツパイロット、マクギリス（シッキム）の腕が加われば、スラスターの使えなくなったモビルスーツの対処など、造作も無い。

その不利を悟ってか、バルバトスはすぐさま行動に出た。

メイスを地面へ横薙ぎに振るい、大きく土煙を上げる。抉られた地面の土や砂が、空気に乗って大きく空中へと舞う。

一見すれば地形を生かした目くらましだが、眼前で接敵した今の状態では殆ど意味を成さない。そのような事はマクギリス（シッキム）は元より、三日月とて分からぬほど馬鹿ではない。

「ほう、目眩し……いや、本命は」

だからこそ、すぐにマクギリス（シッキム）は向こうのやらんとしている事に予測を立てた。そして、自身の足元を見据える。

そしてそこには土煙を割き、限界まで姿勢を低くして、メイスを突撃槍のように構えて突進するバルバトスの姿があった。

『ゼロ距離なら……っ!!』

その奇襲攻撃に、マクギリス（シッキム）は感嘆しつつも、冷静に対応した。

ほんの少し後ろに下がり、バエルの姿勢を変え――――

『がっ……!?』

――――バエルソードを、弱点の胸部へ向けて斬りつけた。その衝撃は、大きくコクピット内部まで響く。

バルバトスの今の奇襲攻撃は、敵がこちらの位置を把握出来ていない場合に、効果を発揮する。だが動きの予測を立てれば、いくらでも対処のしようはある。

三日月が悪かったという訳ではない。これは、今まで幾度となく強敵（ライバル）達と戦って来たマクギリス（シッキム）と、今日初めてモビルスーツに乗った三日月――――その経験の差だった。

そしてマクギリス（シッキム）は、周囲の様子を確認する。

大洗側の戦車とモビルワーカーは全機が撃破され、聖グロも、隊長機は残っていたが、殆どの機体がやられていた。

「……ここまでのようだな」

そろそろ潮時だろう。

バエルソードを腰のホルダーに収納すると、背面のウイングを展開する。最後に、地に伏したバルバトスを一瞥すると、賞賛の意を込めた笑みを浮かべた。

「……さらばだ。大洗の、名も知らぬモビルスーツパイロット」

そう言い残すと、バエルはスラスターを噴かせ、天高く優雅に飛び去って行った。

一方、残されたバルバトスは、まだ白旗判定にはなっていなかった。

脳の揺れているような感覚に目眩を覚えながら、三日月が朧げな意識の中操縦桿を握りしめる。

「……まだだ……!まだ……!」

バルバトスの上半身を起こし、立ち上がろうとする。

三日月の戦意も、消えてはいなかった。初めて戦ったとは言え、あれだけやられて黙っていられる筈がない。

一歩進み出そうとペダルを踏み出そうとした、その時。

「まだッ!……だ……あ……」

そこで遂に、意識が途切れた。バエルの攻撃による衝撃は、さっきまで三日月の脳内を、トンカチで鉄板を叩いたように響いていたのだ。

そして三日月の意識が途切れるのとほぼ同時に、バルバトスもツインアイから光を失い、項垂れるように機能を停止する。そして胸部からは、戦闘不能を示す白旗が上がっていた。上半身を上げた段階で、既にバルバトスも限界だったのだ。元より急ごしらえで用意した機体。ここまで持ったのが奇跡だろう。

『大洗学園チーム、全車両、行動不能！よって、聖グロリアーナ学院の勝利！』

そしてほぼ時を同じくして、会場にアナウンスが響く。彼らの攻防の間に、戦車隊も決着が付いていた。昭弘のモビルワーカーは、聖グロのモビルワーカー隊最後の一機と相打ちになり撃破され、オルガ機もみほ達を庇い行動不能。

みほ達は残り一機の状態で獅子奮迅を活躍をしたものの、それでも差を埋めるには至らなかった。最後はダージリンのチャーチルとの一騎打ちに持ち込んだものの、敗北。

こうして大洗学園の初戦は、結果を見れば敗北という形で幕を下ろしたのだった。

◆

試合で大破した戦車やモビルワーカーが、次々と運ばれていく。
砲身が曲がったものや、装甲がひしゃげたもの。履帯が大破したものなど、激戦を物語る戦車の数々が、みほ達の前を通り過ぎていった。
そしてその最後尾に、一際目立つ一機――――モビルスーツ、ガンダムバルバトスが運び込まれる。
「……」
その運び込まれたバルバトスを、オルガとみほは神妙な面持ちで見つめる。
するとその後ろから、三日月が火星ヤシを摘みながら戻って来た。
「ミカ!」
「ミカさん!」
「……オルガ、みほ。それにみんな」
みほ達の周りには、Aチームの面々もいた。
全員が揃ってボロボロで、埃まみれになっている。それは三日月も同様で、白いタンクトップが煤けている。モビルスーツに乗った際に、制服を脱いでいたのだ。細身ながらも筋肉質の体には、土汚れが付いていた。
「よくやってくれたな、ミカ」

「うん。ミカさんがいなかったら、私たちすぐにやられちゃってた」
「そうです！それに、貴重なガンダム・フレームが……って、オーガス殿？」
優花里が、三日月の様子に顔をしかめる。
三日月は三人の言葉に首を振ると、自嘲気味の笑みを浮かべて言った。
「……今回、結局俺、あんまり役に立たなかった。試合にも負けて……ごめん」
「何言ってやがる。充分やってくれたじゃねえか。お前がいなかったら……」
と、そこでオルガは言葉を止めた。こちらに向かって、歩いてくる一団がいたからだ。
三人ほどの女生徒に、一際身長の高い、金髪の面立ち良い男生徒。さっきまで戦っていた、聖グロの生徒達だ。
その中の男生徒が、三日月の姿を見つけると、歩み寄って尋ねた。
「……先程、あの白いガンダムフレームに乗っていたのは、君かね」
「……そういうあんたは、あの白い羽付きに乗っていた人？」
「ああ。私はマクギリス・ファリド。又の名をシッキム。君の名は？」
「……三日月・オーガス」
「そうか。……その名前、覚えておこう」
そう言って満足げな様子になると、マクギリス（シッキム）は身を翻して戻っていった。
その様子を見て、残った少女らの隊長、ダージリンは口元に手を当ててくすくすと含

み笑いをする。
「あなた方が隊長さんですわね?」
「え?あ、はい」
「はい」
笑みを止めると、今度はみほとオルガの方を見る。
「貴方がた、お名前は?」
「……」
そう聞かれて、一瞬言い淀んでしまう。戦車道を志している人達に、自分の名前はあまり教えたくなかった。
が、やがて躊躇いがちに言い紡ぐ。
「……西住、みほ」
そして、オルガも。
更に彼は、どうせ隠しても無駄だろうと、学園では名乗っていない、本当の名前を告げたのだった。
「……オルガ……オルガ・西住・イツカ」
「っ、オルガ!?」
オルガがその名前を言った途端、僅かにどよめきが走る。沙織、華、麻子はそれが本

名だという事実に。優花里と三日月は、何とも言えない表情で、口を噤んでいた。
そしてみほは……オルガがその名前を言ったことに、驚いた。
「西住……もしかして、西住流？それにあなた……」
ダージリンはオルガの方を見ると、何か思い当たる節があるような様子で、神妙に口を開いた。
「もしかして……鉄華団団長の、オルガ・西住・イツカ？」
「……っ……ええ。今は、オルガ・イツカとだけ名乗っていますが」
鉄華団。
その名を聞いた途端に、オルガは胸を締め付けられるような感覚に襲われたが、何とか堪えて絞り出す。みほがオルガを気遣うように視線を向ける。
その様子を見たダージリンは、何かを悟ったような表情になり、続けた。
「……いえ、これ以上訊くのはやめておきましょう。それにしても二人とも……まほさんとは随分違った戦い方なのね」
そう言い残すと、ダージリンは他の女生徒を引き連れて、向こうで待っていたマクギリス（シッキム）と、紫髪の、何やら秀麗な顔を不機嫌そうに歪ませた男生徒の元へと戻っていった。
そして彼らを見て、三日月が口を開く。

「……オルガ。俺、もっと強くなる。オルガの、みほ達の役に立てるように。もっともっと頑張って……少なくとも、あのマクギリスって人に、勝てるくらいに。……あの人に、勝ちたい」

そう言った三日月の目には、静かながらも確固たる闘志が宿っていた。

あの敗北は、三日月にある意識の変化を齎していた。戦う理由が、『オルガやみほ達の役に立つ』だけだったのが、『ライバルに勝ちたい』という意識も芽生えたのだ。

初めて他校の選手と戦ったことによる、意識の変化。

それはほんの少しの、しかし確実な変化。三日月・オーガスの……後に、『大洗の白い悪魔』と呼ばれるようになる男の、小さな始まりの一歩。

「……そうだな。俺もまだまだ頑張らねえと」

その言葉を聞いたオルガもまた、決意を新たにした。

一度戦車道の道から遠ざかったあの記憶は、まだオルガの胸の中にしこりのように残っている。だが、いつまでもそれに囚われるのは終わりだ。

前に進む、その為に。

◆

その後散っていく三日月の背を、静かだった麻子が引き留めた。
「……三日月」
「ん？」
「……頑張れよ。一応、応援する」
麻子からの予想外の声援に、三日月は一瞬キョトンとすると、しかし口元にうっすらとした笑みを浮かべた。
「……ありがと、麻子」
三日月は礼をすると、ポケットから火星ヤシを二つ取り出し、一個を麻子に分けた。
口にした果実の味は甘いはずなのに、何故か、苦く感じた。三日月は口から実を取り出し、顔をしかめる。
「……ハズレか」
ポケットからもう一個を取り出し、口に放る。
今度はちゃんと、甘かった。

◆

学園艦に戻る頃には、すっかり周囲は暗くなっていた。

疲れからか眠い（麻子はピンピンしていた）意識を保ちつつ、甲板にあがる。
「……？」
みほ達の前には、申し訳なさげに立つ六名の女生徒――――一年生組のＤチームと、脇にシノの姿があった。
「シノ。それに、お前ら……」
「ああ、オルガ。こいつらがちょっとな」
シノが少し困ったような顔になり、Ｄチームの隊長である澤梓の方を見る。
それからさほど間も置かずに、梓が頭を下げた。
「西住隊長……すみませんでした！」
「「「「すみませんでした！」」」」
「えっ？」
突然の謝罪に、みほは困惑する。
いきなり謝罪されるようなことなど、あっただろうか。
「……どうしたんだ？」
「いや、それがよ――――」

◆

時は試合が終わり、夕陽が暮れ始めた頃。
学園艦に戻る準備をしていたシノのもとに、梓達六人が来た。
「お前ら……」
「シノ先輩……戦車を放り出して逃げたりして、すいませんでした！」
梓がそう言って頭を下げると、残る五人も続くように頭を下げる。
そう。梓達Dチームは先の試合中、自分の戦車を放棄して逃亡したのだ。その時シノは、逃げ出す彼女らを諌めていた。
彼女らも責任を感じていたのだろう。申し訳なさげな表情で、シノに頭を下げている。
「……ったく、しゃあねえなぁ」
シノはしばらく黙っていると、やがて苦笑して、頭を掻いた。
「謝るんなら、俺じゃねえだろ」
「え……」
「謝るんなら、隊長にだろ。行こうぜ。一緒に付いてってやっからよ」
そう言ったシノは、頼もしい表情をして、学園艦を指した。
折角できた後輩を無碍にする事など、シノに出来るはずもない。

「っ……はいっ!」

◆

「　　つーわけだ。隊長、俺からも謝らせてくれ」
「えぇっ!?いや、そんな……」
シノが頭を下げると、Dチームの面々が口を開いた。
「先輩達、格好良かったです!」
「すぐ負けると思ってました……」
「私たちも、次は頑張ります」
「絶対頑張ります!」
彼女らのその様子に、みほの表情も穏やかになる。
それを見たシノは満足げに笑うと、彼女らの方を向いた。
「よーしお前ら!反省は終わりだ!明日から一緒にみっちり練習すっぞ!!」
「「「「「はいっ!!」」」」」
シノのその頼もしさに、Dチーム全員が力強く応える。
その光景を見て、オルガが微笑ましげな表情になった。するとそんな彼らのすぐ側

に、生徒会がやってくる。
「これからは、作戦は西住ちゃんとオルガちゃんに任せるよ」
「へっ……？」
会長のその言葉に、河嶋が愕然とした表情になる。が、気に留めるものはいなかった。
次いで、側に控えていた柚子が、バスケットを持って彼らに歩み寄る。
「そいつは……」
「聖グロの隊長さんからですって」
そう言われて中を開くと、そこには丁寧に包装されたティーカップと、紅茶の茶葉、そして一通の手紙が同封されていた。
【Ｔｏ　Ｆｒｉｅｎｄ】と書かれたその手紙を開くと、そこには聖グロ戦車隊長のダージリンと、機動隊長のマクギリス（シッキム）からのメッセージがしたためられていた。

『今日はありがとう。貴方達のお姉様との試合より、面白かったわ。また公式戦で戦いましょう。　ダージリンより』
『素晴らしい試合をさせてもらった。ガンダム・フレームを操り、強靭な生命力を以って戦う君たちの姿を見た、あの時。私はそこに、我が校の伝説の一幕を垣間見た。また戦える日を、楽しみにしている。　シッキムより』

その手紙を読み終えると、優花里が感嘆の声をあげる。
「凄いです!聖グロリアーナは、好敵手と認めた相手にしか、紅茶を送らないとか」
「そうなんだー」
「昨日の敵は今日の友、ですね!」
「……いいね、それ」
優花里の言葉に、三日月が同意する。
「公式戦は勝たないとねぇ」
「ああ。……みんな、ここで終わりじゃねえぞ!寧ろここからがスタートだ。次は絶対に、俺たちが勝つ!」
オルガの力強い言葉に、その場の全員が頷く。
すると沙織が、ふと疑問をこぼした。
「公式戦?」
その疑問に答えるように、優花里が元気いっぱいに口を開いた。
「戦車道の、全国大会ですっ!!」
次の戦いは、もうすぐ。

第漆話　友との繋がり

「……」

オルガは寮の自室で目覚めると、棚に置かれた写真立てに目を止めた。

起き上がり、手に持って写真を眺める。

そこに写っていたのは、オルガと、大洗の仲間ではない、もう一つの仲間達の姿だった。

普段着ている白の制服ではない、黒を基調としたジャケットに身を包み、多くの仲間達に包まれながら笑みを浮かべている。

そして両隣には、一組の男女がいた。

右側の一人は金髪に、どこかツンケンとした顔立ちの女子。オルガに肩を組まれ、煩わしそうに表情を歪めながらも、どこか笑みのようなものを浮かべている。

そして、左にいるもう一人は帽子を被り、優しげな表情をした恰幅のいい男子。帽子のつばに手を掛けて、苦笑しつつもオルガの肩に、返すように手を掛けている。

その後ろには、妹のみほや、他の多くの仲間。そして――――

「……はぁ。らしくもねぇ」

そこまで見て、オルガは写真立てを棚に戻した。
寝巻きを脱いで、制服に着替える。今日は全国大会のトーナメントの抽選会がある日だ。万が一遅れるようなことがあれば、一大事だ。
軽く食事を済ませ、居間を後にする。……その前に。
「……今の俺をお前らが見たら、どう思うんだろうな」
最後に写真立てを一瞥すると、オルガは今度こそ家を出た。
自分の中にある、忘れられない、忘れたい事を、振り切るかのように。

◆

「……おやっさーん、ここの配線って、五番のやつでいいんですかー？」
「あー？だからそこは五番じゃなくて七番だっつーの」
「なーなーチャド、ここの駆動系統なんだけど、もう少し詰められないかなー？」
「ホシノ先輩、そこ直すのもう十回目っすよ」
大洗学園の整備倉庫では、今日も自動車部の面々が忙しなく動いていた。
先の聖グロとの試合で損傷した戦車やモビルワーカーの修理に、ほぼ全ての部員が動員されて、そこかしこから金属音が鳴り響いている。　さらにその部員の多くは、倉庫

の一角を占めるように存在しているモノの修理に、駆り出されていた。
「いやー、まさかここに来てモビルスーツの整備ができるとは思わなかったねー」
「全くだな。……長いこと放置されてたせいで、ＯＳ面も大分やられちまってる。こりゃ直しがいがありそうだぜ」
その一角で佇み、今は全身をアームで固定されたモビルスーツ、【ＡＳＷ―Ｇ―０８ガンダム・バルバトス】のコクピット付近で、自動車部員の二年生であるツチヤと、ダンテ・モグロが修理をしていた。他にも多くの自動車部員達があちこちで修理を進めており、もれなく全員が好奇心に目をギラつかせている。
それもそうだろう。何せこの整備倉庫にモビルスーツが丸々一機来るだなんて、入学してから今まで思っても見なかったのだから。
そしてそんな忙しない部員達の間を縫うように、おやっさんこと雪之丞が葉巻を吹かして腹巻きに手を突っ込みながら、カチャリカチャリ、と義足を鳴らせて歩いて来た。
「よぉ～、どうだそっちは」
「あー、おやっさん。どうもこうも、こりゃ殆どガタが来ちまってるよ。塗装ハゲなんて数えんのも億劫だし、肩に至っちゃ装甲だって取り付けられてねえんだぜ？」
「まー、こいつも古い機体だからなぁ」
足元で修理していた一年生、ライド・マッスが頭を掻きながら、おやっさんに助けを

求めるように言う。ライドの言う通り、バルバトスはほぼ全身の装甲のナノラミネート塗料が剥げかかっており、バエルとの戦いで傷付いた胸部の装甲など目も当てられない程にひしゃげてしまっている。コクピット部が無事だったのは、流石という他無かったが。

「俺がこいつを見てた時にゃ、もうちっと格好付いてたんだがなぁ」

しみじみと感慨にふけるように、雪之丞が呟く。

その様子を見たタカキが、近寄ってバルバトスを見上げながら訊いた。

「このモビルスーツって、大昔に造られたんでしょ？」

「ああ。昔も昔、厄祭戦時代の骨董品だ。ま、昔の戦車道で使われてたのは、大抵がその骨董品だったんだけどな」

「厄祭戦って……歴史の授業でやった、あのでっけぇ戦争のことだよね？」

そのワードを聞いたライドが、振り向いて訊き直す。

「そうだな。今から三百年前に起こった、でっけえ戦争の事だよ」

厄祭戦。

人類史上最悪とも称される、惑星間戦争の名称がそれである。

元は他の惑星の移民者達の独立運動から端を発し、その果てに文明が大きく後退する

程の壊滅的被害をもたらした、人のもたらした災厄として今もなお語り継がれている。
モビルスーツとはその厄祭戦を始め、その前後に幾度となく行われた戦争に於いて造られた、人の形を模した機動兵器なのである。
「その遺物が、今じゃスポーツの一種になってるたぁ、因果なものだな」
「おやっさーん！ちょっとこっちの方見て欲しいんだけどー」
「わぁかった！今行く！」
雪之丞は部員の声に応えると、葉巻を足で潰して向かっていった。向かう先には、何やらバラされたモビルスーツらしきパーツが広がっている。
「オルガ達は、今頃抽選会に行ってる頃か。さて、どんな学園とぶつかることになんのやら……」
かつてこの学園に戦車道があった頃。
選手達の戦車やモビルワーカー、モビルスーツを整備していた時を思い出しながら、雪之丞はふと呟いた。

◆

抽選会の帰り。

　みほ達は会場の近くにある戦車喫茶で一息ついていた。戦車を象られて作られた色取り取りのケーキをつつきながら、先の抽選会により一回戦で当たることになってしまった相手に溜息をついていた。

「ごめんね、一回戦から強いところに当たっちゃって……」

「気にすんな。全国大会に出る以上、遅かれ早かれぶつかる事になる壁だ」

「サンダース大学付属高校って、そんなに強いんですか？」

「強いっていうか、凄くリッチな学校なんです。巨大複合企業のテイワズがスポンサーになってて、戦車やモビルスーツの保有数が全国一なんです」

　サンダース大学付属高校は、長崎県に所在を置く高校だ。厄祭戦後にSTRATEGIC ALLIANCE UNION（S A U）として統合されたアメリカ管区と深い関わりを持ち、偶に宇宙に出た際は、アメリカの学園艦との交流も盛んに行われているという。何より、戦車道の全国大会へは出場を何度も果たし、上位入賞も珍しくない強豪校なのである。

　そして、そのサンダースの資金源の一役を担っているのが、木星圏に本拠点を置くテイワズという巨大複合企業である。本業は惑星開発などだが、モビルスーツや戦車の流通なども賄っており、サンダースはそれらの恩恵を優先的に受けることができるのだ。

「チーム数も一軍から三軍まであって、現在の公式試合のレギュレーションで使える、宇宙紛争時代のモビルスーツも取り揃えてあるんですよ」

宇宙紛争時代とは、厄祭戦後のいざこざによって、あちこちで戦乱が巻き起こった時代の事だ。火星の独立運動や、コロニーの大規模デモ、経済圏同士の戦争など、決して少なくない被害を齎した混迷の時代である。

その時代に造られたゲイレールやグレイズ、レギンレイズ、獅電などのモビルスーツは、現在は戦車道の公式試合での使用が許されており、厄祭戦時代のモビルスーツよりも、戦闘で比較的優位に立つことができるのだ。

「公式戦の一回戦は、戦車の数は十両、モビルワーカーの数は七両、モビルスーツの数は三機までって限定されてるから。砲弾とかの総数も決まってるし」

「でも戦車十両に、モビルスーツ三機って……うちの倍じゃん！モビルスーツは三倍だし、それって勝てないんじゃ……」

「……」

沙織のその指摘に、みほが黙り込む。すると、端の席でチョコレートケーキを食べていた三日月が答えた。

「まあ、なんとかやるよ。作戦はみほとオルガに任せるし」

「お前なぁ……」

いつも通りのあっけらかんとした調子に、オルガが思わず嘆息する。が、すぐに三日月のフォークを持つ手が止まった。

「ミカ？」
「……それに、それくらいやれなきゃ、あいつには勝てない。あのシッキム……マクギリスに」
「……」
そう言う三日月の目には、確かな闘志が宿っていた。
先日の練習試合で、大敗を喫した因縁の相手。白い羽根付きのモビルスーツに乗り、三日月のバルバトスを全く寄せ付けなかった、越えるべき強敵（ライバル）。
あの男に敗北した悔しさ、屈辱が、三日月の中に今もなお燻っていたのだ。そしてその悔しさをぶつけるように、チョコレートケーキにフォークを勢い良く刺し、大口を開けて頬張る。
その鬼気迫る空気を察してか、沙織が話題を変えた。
「……そ、それより！全国大会ってテレビ中継されるんでしょ！ファンレターとか来ちゃったらどうしよう～」
「生中継は決勝だけですよ」
「じゃあ、決勝行けるように頑張ろー！あとあと、折角なんだし、みんなのチーム名みたいなのも決めたいよね！」
笑顔でそう締めた沙織が、ケーキを一口頬張る。

「……だな。これから頑張らねえと」
「ほら、みほとオルガくんも食べて！」
「あ、うん」
「おう。……おぉ、なんだよ。意外といけんじゃねえか」
ケーキを一口食べて、オルガが思わず呟く。
その様子を見て、みほも肩の力抜いて、ケーキを口にしようとした。
その時、だった。

「……副隊長と、団長？」

声が、聞こえた。聞き慣れた、声だった。
「「……っ!?」」
みほとオルガが揃って、声のした方を振り向く。
「……ああ、元、でしたね」
そこには、三人の女生徒が立っていた。
茶色がかった銀髪の、目つきの鋭い女生徒。
逸見エリカ。今さっき、オルガ達を呼んでいた声の主だ。

そしてもう一人は、黒の髪と鋭い目元以外はみほにそっくりな女生徒。
「お姉ちゃん……」
「……」
西住まほ。
強豪校、黒森峰学園の戦車道を率いる、みほの、そして……オルガの、姉であった。
そしてその側に、もう一人。
金髪の、三人の中では一際背の高い女生徒。
朝、オルガが写真で見た少女――――
「……ジュリエッタ」
「……イツカ」
ジュリエッタ・ジュリス。
オルガにとってその人は、ある種複雑な関係を持つ人であった。
「……二人とも、まだ戦車道を続けていたとはな。特に、オルガ」
「……」
まほの言葉に、みほは思わず身体がすくんでしまう。
一方のオルガも、俯きがちになってしまう。例え家族の縁を切った相手とはいえ、姉であった人からの言葉は、オルガの胸に深く突き刺さった。

するとその様子を見ていた優花里が、堪らずといった様子で言葉を吐く。
「お言葉ですが、あの試合のイツカ殿の判断は、間違ってませんでした！」
「部外者は口を出さないで欲しいわね」
優花里から向けられた敵意に、更に熨斗つけて上乗せした敵意を向けて返すエリカ。
そのメスのように鋭い声音に、優花里も黙り込む他なかった。
「イツカ……戻って、いたのですか」
「……まあな」
「……ッ!!」
今度はジュリエッタが、オルガに対し問い掛ける。
その声音はエリカのような鋭さは伴っていなかったが、代わりに困惑と一抹の悲しさ、そしてヒリヒリと伝わる程の、しかし複雑な色の怒気を孕んでいた。
握り込んでいた拳を開くと、オルガの胸ぐらを掴んだ。
「オルガっ！」
「っ……」
「みほ、ミカ！……良いんだ」
「何で……私達を、見捨てておいて……どうして、この道に帰ってこれたのですか!?
どうして今のあなたの背中には、鉄華の印が無いのですかッ!?」

「……っ」

怒りを滲ませた、しかし今にも泣き出しそうな声音で、ジュリエッタが周囲の目もはばかる事なくオルガに怒鳴り付ける。

そのただならぬ雰囲気に、三日月達も言葉を発することが出来なかった。ジュリエッタの口から発せられた言葉を、オルガはただ黙って聞いている。

「どうしてッ……どうしてッ!!」

「ジュリエッタ!……その辺にしておけ。周りの客に迷惑だ」

しかしその剣幕を、まほが制する。

その言葉で冷静になったのか、ジュリエッタはオルガの胸倉を離すと、表情を正した。

「……申し訳ありません。見苦しい姿を」

「いや、いい。……行くぞ、二人とも」

「はい、隊長」

「……はい」

三人が身を翻し、大洗の面々に背を向ける。

だが、そこでまほの後ろを歩いていたエリカが振り向き、笑みを浮かべて言い放った。

「一回戦はサンダース付属と当たるんでしょう? 無様な戦い方をして、西住流の名を汚さない事ね……て、そういえば元団長は、縁を切ったんでしたっけ」

「……っ」
彼らに向けた盛大な当て擦りの言葉は、みほとオルガに深く突き刺さった。
しかしその言葉を無視できないもの達が、ここにいる。
「何よその言い方！」
「あまりにも失礼です！」
「……あんたがオルガとみほの何なのかは知らないけど。いきなり現れて、知ったような口ぶりで、俺の仲間を馬鹿にしないで」
沙織、華、三日月の三人が、エリカの言葉に敵意を滲ませて言葉を返した。
だがその三人の言葉に、エリカもまた鋭い視線を返して反論する。
「……貴方達こそ戦車道に対して失礼じゃない？無名校の癖に。この大会はね、戦車道のイメージダウンになるような学校は、参加しないのが暗黙のルールよ」
「……イライラするな、あんた」
「強豪校が有利になるように、示し合わせて作った暗黙のルールとやらで、負けたら恥ずかしいな」
とそこで、今まで沈黙を貫いていた麻子が口を開いた。エリカの言葉に対して、座って視線も合わせず、静かながらも痛烈な皮肉を返す。その皮肉に対し、エリカは憎々しげな視線を返した。ちなみに、三日月は既に座っており、敵意のこもった視線を向けな

がら、ヤケのようにケーキを食べていた。
「もし、あんた達と戦ったら、絶対負けないから！」
「やめろ沙織。これ以上んな事で争うな」
「ふっ、頑張ってね」
沙織の言葉に、エリカが嘲笑と共に踵を返す。
ジュリエッタもオルガの方を複雑な視線で見つめながら、まほに付いていくように店を後にした。
「べーっ！」
「嫌な感じですわ」
姿が見えなくなっても、沙織と華が敵意を隠さずに呟く。
するとそんな二人に、優花里が躊躇いがちに進言した。
「あの……今の黒森峰は、去年の準優勝校ですよ。それまでは九連覇してて……」
「えっ!?そうなの!?」
優花里の言葉に、沙織が驚いた表情をする。と同時に、そんな相手に大言を吐いてしまったことに一抹の後悔がよぎった。
「……関係ないよ」
だがその不安を見透かしたように、残っていたケーキを口にした三日月が呟く。

「どんな奴が相手だろうと、立ち塞がるなら全力で戦うだけだ。それがサンダースだろうと、さっきの黒森峰って奴らだろうと」
「ミカ……」
「ミカさん……」
三日月のその言葉に、周囲が呆然となる。
するとそんな空気を察してか、三日月が躊躇いがちに口を開いた。
「……悪いけど」
「ケーキ、もう二つずつ頼んでもいいか？」
続くように、麻子が言う。
二人のケーキの皿は、既に空になっていた。

◆

濃い夕日が射す水面に、徐々に黒い影が増えていく。
艦の上で潮風にあたりながら、みほは夕方の海を物憂げに見詰めていた。
「みほ」
「……オルガ」

そんなみほの様子を見て、オルガが話し掛ける。
みほの隣まで来ると、共に暮れなずむ夕日を見つめた。やがて俯きがちに顔を傾けながら、自嘲するようにオルガが話す。
「……全国大会に、また出る事になるなんてな」
「うん。……この学校に転校して、また戦車道を始めるなんて、少し前の私達に言ったら、びっくりしちゃうかも」
「違いねえ」
みほのその言葉に、小さく笑う。
全てをかなぐり捨てて、振り切ったつもりで。あの道から遠ざかったはずなのに、結局その道は、オルガ達の前に現れた。まるでその道を行くのが宿命だと言わんばかりに、いくら遠ざかっても離れない。
いや、もしかしたら。遠ざかったつもりで、その実は自分から近づいていたのかもしれない。
この学校に来て、その道を選んだ、新しい友の姿がなんだか眩しくて。友から伸ばされた手が、なんだかとても大きく見えて。
そのまま先頭に立って、また仲間が出来た。
だったら。俺は――

「……なぁみほ。俺、決めたよ」
「決めたって……何が？」
「さっき沙織が言ってただろ。俺たちの新しいチーム名だ」
そしてオルガは、真っ直ぐ前を見据えて、ほんの少しの勇気を振り絞って、その名前を告げる。

「――――大洗鉄華団」

「……！」
その名前を聞くと、みほはほんの少しの驚愕を顔に滲ませ、しかしすぐにふっと笑みを零した。
「――――もう後ろを振り返るのはやめだ。二度とは繰り返さねぇ。……俺は、もう一度守っていく。最後までな」
「うん。――――そうだね」
そして、一度運命から逃げた兄妹は。
今一度、ここに鉄華の誓いを立てたのだった。

第捌話　大洗鉄華団、初陣です！

低く重い地鳴りが、大洗学園の練習場に響く。
音の発生源である一角には、二体のモビルスーツが互いに得物を構えて戦っていた。
片や巨大なメイスを持ち、片や片手持ちのアックスを持っている。
『ふっ――――――――！』
白いモビルスーツ、バルバトスが、大振りにメイスを振るうと、相対している、アックスを持ったモビルスーツが防御の姿勢を取り、防ごうとする。
が、一瞬反応が遅かった。大きく叩き込まれた一撃が機体を揺らし、大きく後退することになった。
『のわぁぁぁあっ!?』
『昭弘。防御のタイミング、もう少し早く』
『ちょっと待てよ！俺はまだこいつに慣れてねえんだぞ……！』
緑のモビルスーツから、抗議の声が飛んでくる。日頃鍛え上げられた筋肉が特徴的な、三日月と同じ戦車道の同士、昭弘・アルトランドの声だ。
そして彼が今乗っていた機体は、一見すると聖グロの面々や、多くの学園で導入され

ている、戦車道での使用導入率ナンバーワンの実績を誇る優秀機、グレイズに見える。
だが、足りない部分を補ったと思われる肩や頭部の白い装甲や、背面に取り付けられた大型バーニアのバックパックが、普通のグレイズとは異なる事を如実に物語っていた。
ＥＢ―０６／ｔｃ　グレイズ改。
先日の戦車探索により、パーツごとに大きく分解された状態で発見されたグレイズを修復したこの機体は、便宜上このような名称で呼ばれていた。
「おーいおやっさん、どうだ、あのグレイズは」
「あん？オルガか。予備の装甲材で補強しただけにしちゃあ、中々悪くねえ性能だな。問題はパイロットだが……」
「昭弘なら大丈夫だろう。ミカもモビルスーツ同士で訓練できて、練度も上がって来てるからな」
オルガ達の目の前で模擬戦を繰り広げているバルバトスの動きは、聖グロ戦の時のそれと比べて幾ばくも良くなっているように見える。そしてそれは動きだけではなく、バルバトス本体にも変化が見られた。
前は剥き出しだった両肩のフレームには、ツチヤ曰く「電源ボタンみたい」な模様が付けられた白い装甲が取り付けられ、ガントレットを装備していた左腕部も、右腕と左

右対象の装甲に換装されている。またバックパックには何やら鉄の板棒のような武器と、大口径の重砲が装備されている。

さしずめ、ガンダムバルバトス　第二形態と言うべきそれは、雪之丞がかつての大洗で整備していた当時の姿に似せるよう整備を指揮し、自動車部員達の高い技術力によって、ガンダムフレームの高い性能を十全に発揮できる、いわば本来の姿の形態なのであった。

『――――そろそろ休憩にしようか』

『あ、ああ』

やがて模擬戦が終わり、二体のモビルスーツが地に膝をついて伏す。

コクピットハッチが開くと、中から三日月と昭弘がそれぞれ出てくる。その様子を見ると、オルガは二人の元へと駆け寄った。

「ミカー！どうだー調子はー!?」

「うーん、いいんじゃないのー？多分」

「多分って……」

相変わらず火星ヤシを摘みながら、マイペースにそう答える三日月。

だがそれを咀嚼し終えると、再び口を開いた。

「少なくとも、前の時よりはこいつも機嫌良いし、大丈夫だと思うー」
「……そっかー！」
取り敢えず、動かしている彼が大丈夫だと感じるのなら、大丈夫なのだろう。それに先の動きや今の三日月の様子を見ても、無理をしているという様子も無い。少なくとも、問題無いのは確かなようだ。
「昭弘の方はどうだー!?」
「ああ……一応、どうにかなりそうだ。操作性が良いんだろうな」
昭弘がグレイズ改のパイロットに選ばれたのは、彼が三日月に次ぐポテンシャルのモビルワーカー乗りだったからである。鍛え上げた肉体によるフィジカルは、コクピット内部が激しく揺れるモビルスーツ戦で大きく有利になる。操縦技術があっても、体力が伴わなければこと戦車道では致命的になりかねない。
そしてその予想通り、昭弘も練習を重ねるうちに、段々と操縦方法を掴んできたようだった。慣れてない、と本人は言っていたが、グレイズの最大の長所である操作性の良さにより、三日月のバルバトスにもある程度付いていけていた。
阿頼耶識こそ搭載されてない、というよりかはその短期間で出来なかったものの、一つでも多くの戦力が欲しい大洗にとっては僥倖である。
戦車隊や機動隊の面々もそれから練習を積み重ね、前よりも格段に動きが良くなって

来ている。
　来たるサンダースとの試合でも、きっと活躍してくれるだろう。
　夕暮れ時。練習でヘトヘトになった面々が、生徒会と、そしてオルガの前に整列した。
「それでは、本日の練習を終了する。解散！」
「の前に、オルガちゃんから話があるんだってー」
「え？」
　河嶋の号令で解散しようとした時、杏が補足するように付け加えた。
　そしてその説明通りに、オルガが皆の前に出てくる。一度深呼吸をすると、皆に聞こえる声で話し始めた。
「――――いよいよ、全国大会が始まる。相手はサンダース大学付属高校。言うまでもなく、強豪校だ。……いや、違えな。俺たちにとっては、これから戦う相手全てが強豪校だ！」
　オルガの大きな、そしてハッキリと伝わるその声は、皆の胸に電撃のように伝わっていった。
　その大柄な体格で皆を見渡しながら、オルガは続ける。
「今の俺たちには立派な後ろ盾も、他に頼れる味方もいねえ、完全にアウェイな状態だ。でもだからこそ、俺たちは一丸となって立ち向かっていける。今日まで短い間だが、お

前らとはそういう絆を作ることが出来たと、俺は思っている」

その場の誰もが、オルガの言葉を聞いていた。

まるで彼の姿が、自分達の進むべき道標なのだと、そう思えて仕方なかった。

「立ち塞がるのはとてつもなく高い壁だ。それでも、俺たちが一つになることができれば、超えられない壁じゃねえ。俺たち――――――大洗鉄華団の力を！」

『!!』

オルガの力強い言葉に、全員がにわかに湧き出した。

だがそこで、疑問符の浮かぶ言葉が出て来た。そしてそれを代弁するように、一年生の澤梓が手を挙げて質問した。

「あの！大洗鉄華団って、何ですかっ？」

その質問に、オルガは堂々と答える。

「――――――俺たち全員の新しいチーム名だ。ちょっと前に決めてた」

「私たちの……」

「チーム名……！」

「すごーい！なんかカッコイイ！」

オルガのその言葉に、段々とその場の勢いが増していく。

「なっ！お、おい何を勝手に……」
「いーんじゃない？可愛くて」
「なっ、会長ぉ!?」
「可愛い、のかなぁ？」

「うぉマジか、超カッケェ!!」
「ちょ、オルガ！何一人で決めてんだよ！こーいうのはもっとみんなで……」
「細けえ事気にすんなよユージン！ハゲるぞ」
「なっ……!?」
「なっ、いいよなぁ？三日月！」
「……うん、良いね」

「うむ、中々勇ましい名前だ。正しく、ロンメル将軍の第七装甲師団のような……」
「いやいや、一年戦争のジオン公国軍のリビングデッド師団のような……」
「一年戦争で言うなら、どちらかと言うとムーア同胞団だろう」
「グリプス戦役のエゥーゴ」
「「それだぁっ!!」」

「鉄火団？鉄の火ってこと？」
「鉄火丼の事だったりして！」
「流石にそれはないと思うよ……」
「どっちでもいいじゃない！要は根性のあるチーム名よ！」

続々と、皆の興奮した声が飛んでくる。
「うーん、なんだか可愛げが無いけど……でもいっか！新しい名前ってのは良いよね！」
「大洗鉄華団……なんだか華のある名前ですね」
「……どっちでも良い」
沙織や華、麻子も感想を漏らす。
すると、みほの隣にいた優花里が、複雑そうな顔をして効いてきた。
「西住殿。その……イツカ殿は、大丈夫なのでしょうか」
「え？」
「だって、あの名前は……」
優花里が気遣うような様子で、みほに尋ねる。彼女はあの名前が、オルガにとってどんな意味を持つものなのかを、ある程度知っていたからだ。

だがみほはそんな優花里の心遣いを嬉しく思いつつも、その憂いを否定した。
「ううん、大丈夫だよ。だって――――――」
――――――オルガ、笑ってる。
壇上に立って皆を鼓舞するオルガの姿に、みほはかつての記憶を思い出していた。

◆

『……鉄華団？』
『そ。俺たち機動隊の新しい名前だ。中々カッケェだろ？』
『鉄の火、ってこと？』
『違う。鉄の華だ。絶対に散らない、鉄の華。な？いいと思うだろ？』
『うーん……ネズミさんチームは、やっぱり嫌だった？』
『勘弁してくれ。お前のそのズレたネーミングセンスよりかはマシだ』
『ちょ、それどーいう事!?』
『どーもこーもあるか。昔っからその辺のセンスどっかズレてるだろお前』
『その辺ってどの辺!?絶対ネズミさんチームの方が良いよ！可愛いし！カッコいいし！ジュリエッタさんだって良いって言ってくれる筈だよ絶対！』

『いーやジュリエッタなら絶対こっちの方を選ぶね！』
『何よ！ネズミさんの方が可愛いよ！』
『そんなネーミングで良いって言うのは姉ちゃんくらいだ！』
『ネズミさん！』
『鉄華団!!』
『ぐぬぬ……!!』
『……』

『……ぷっ』
『……くっ』
『……ふふっ……はははは！』
『くっ……ははははッ!!』

◆

そうだった。昔どっちがいいかで揉めて、その後何だかんだで鉄華団って名前になったんだった。

あの時はあんな事言ったけど、オルガ。
その名前、きっと今の私たちにとって、何よりも似合ってる名前だと思うよ。

◆

かくして、サンダース戦に向けての大洗学園、もとい大洗鉄華団の練習は、より過密さを増していった。
戦車のフォーメーションや作戦での動き。モビルワーカーと戦車の連携戦術。更には切り札たるモビルスーツの運用や訓練など。
立ちはだかる壁はとてつもなく高い。ならばこそ、彼ら彼女らに妥協すべき道は無かった。短期間でやれる事は全てやり、少しでも作戦通りに迅速に動けるようにする必要があったのだ。
何しろみほとオルガ以外は殆どが素人である。二人に遅れを取るまいと、皆が気合を入れて特訓に励んでいた。戦車の整備や点検も怠ることなく、万全の状態で動けるようにしていく。僅かな動きの乱れが命取りになるなど、戦車道ではよくある話だ。
モビルスーツの方も経年劣化で使い物にならないパーツは殆どが新品に換装され、三

日月と昭弘も模擬戦を繰り返すことで、互いに動きが精錬されていった。阿頼耶識システムにもかなり適応していったようで、時折モビルスーツとは思えないような動きも繰り広げていたのが記憶に新しい。

更に、そんな彼ら大洗鉄華団の始まりを祝うように、皆にある物が支給された。戦車道で使用する、新品のジャケットである。

女子は紺色で、男子はカーキ色のジャケットだった。背中には、それぞれのチームのマークが刺繍されている。男子の方は全員が、背中に赤い華のようなマークを施してあった。

「皆さん、とってもお似合いです」

「いーじゃん！気に入っちゃった！」

「どーだお前ら！これが俺たちのジャケットだ！」

「かっけえなァこのマーク！魚か？」

「はぁっ？花だよ花！オルガさ……じゃなくて、団長に頼まれて俺がデザインしたんだよ！」

「へぇ。凄いね、ライド。俺も気に入ったよ」

「やっぱこういうのがあると、身も引き締まるよな！」

各々が新たな装いに歓喜の声を上げる中、一人静かに物思いにふけっている男がいた。

「……」

昭弘である。新品のジャケットを着込んで腕を組みながら、どこか上の空になって何かを考えていた。

「おい昭弘？どうしたんだよ。ジャケット気に入らなかったのか？」

「ん？ああいや、少しな。ジャケットなら気に入ったよ」

ユージンの問いに軽く答えると、昭弘も皆のところへ向かおうとして――――一瞬立ち止まって呟いた。

「……サンダース、か。……あいつに直接会うのも、久しぶりだな」

その声は、感情を表に出すことの少ない昭弘にしては珍しい、どこか喜色の混じった声音だった。

◆

そして遂に、大洗学園対サンダース大付属高校との試合。全国大会の第一試合の日がやってきた。

会場には多くの人が集まり、皆思い思いに試合が始まるのを待っていた。特に、サンダース側の観客席には大勢の人が詰め寄り、応援団のような人達まで来ていた。

一方の大洗には、数える程の人しか見受けられない。やはりポッと出の弱小チームと、大会常連の強豪校。応援一つ取っても、やはり大洗はこの場でアウェイだった。

選手である生徒達に、長い休息は許されない。会場について少し経ったら、皆それぞれの機体の整備に取り掛かった。試合に備え、最後の点検を怠ることは出来ない。バルバトスとグレイズ改も、何人かの自動車部員達が随伴で付いてきて、一緒に整備をしていた。戦車やモビルワーカーと違って、大型であるモビルスーツを一人で整備するのは難しいからである。

「よーし！では試合が始まるまで待機だ！」

河嶋が全ての機体の整備が完了したのを確認すると、全員に待機命令を出す。皆が思い思いに休息を取っていると、そこに近づく人影が見えた。

「呑気なものね。それでよくノコノコと全国大会に出てきたものね」

灰色を基調とした学生服に身を包んだ、二人の女生徒である。恐らく、サンダースの生徒だろう。何故か二人の姿を捉えた瞬間、優花里が麻子の後ろに慌てて隠れていた。

「貴様ら何しに来た!?」
河嶋が威嚇するように語気を強めて――――――――――――――――――――――――――――普段から割と強いが――――――――――――――――――――――――――――
二人組に問う。
その中の身長が高い生徒が、余裕の声音で答えた。
「試合前の交流も兼ねて、食事でもどうかと思いまして」
「……ああ、いいねぇ」
生徒会長と高身長の生徒との間で、バチバチと火花が散る。明らかなこちらへの挑発に、杏もまた不敵な笑みを浮かべて頷いた。

◆

「凄っ……」
「救護車にシャワー車、ヘアサロン車まで……」
「ほんとにリッチな学校なんですね……」
「すっげえなぁ……ここだけ祭り開いてるみてえだ」
「お、おいシノ。あんま呆然としてんな、舐められんぞ」
「そう言ってるユージン君も、冷や汗流れてるけど……」

案内された場所に着いた途端、面々の口から出たのは感嘆を通り越して、呆れすら含んだ声だった。

ハンバーガーやホットドッグ、ポテトなどの、如何にもアメリカの校風であるサンダースらしい食べ物屋台は勿論、優花里が言ったように救護車やシャワー車やヘアサロン車など、余程特殊な状況でも無い限り一生お目にかかることも無いだろうワゴン車が大量に設置されていた。

「噂で聞くくらいだったが……本当に何でもあるのな」

オルガもそれらのワゴン車を見て、深い溜息を吐く。これらを見てまず思ったのが、これを毎年やってて本当に金とかは大丈夫なんだろうか、という変な心配事だった。

そこでふと隣を見ると、先ほどまでいたはずの三日月がいないことに気付く。が、すぐに見つかった。――――右手に食べかけのチョコレートアイス、左手にドーナツの詰め合わせを持って、隣に同じくアイスを頬張っている麻子を伴って。

「オルガー、ここの食べ物結構美味いよ。一緒に食べる―?」

「……甘い。やはりアイスはいいものだ」

「いやお前ら馴染むの早すぎだろ!?」

「麻子、いないと思ったら!」

二人のあまりに自然体な、というか普段はあまり見られない少し浮かれた様子に、沙

織と揃ってツッコむ。しかし三日月は二人の様子に首を傾げるばかりで、左手に持ったドーナツのパックを差し出した。

「ほは、いっほおまへひへもはっはは（ほら、一個おまけしてもらったから）ら……んぐっ、みんなで食べようよ」

「……お前なぁ……」

そのフリーダムな様子に盛大に溜息をついたオルガは、これ以上突っ込むのも野暮と察して、黙って差し出されたドーナツを一個持っていく。なおよく見ずに適当に取ったからか、取ったものは水色の何かに黄緑色のソースのような物がかかった、一目見てカロリーの化け物だと分かる代物だった。よくアメリカのスーパーとかで売ってる、あの色だ。

「……それ、食べるのか？」

「……まあ食えねえもんじゃねえだろ」

普通のホワイトチョコドーナツを食べていた麻子に心配されながら、ドーナツを恐る恐る口に運ぶ。

「……どうだ？」

「……普通だな。食った後胃もたれしそうだが」

なんだか肩透かしを食らったような気分で、それはそれで残念に思いながらも、残っていた分を咀嚼する。食べ終わってから口内の水分がスポンジで吸われるかのように

急速に失われるのを感じ、今度は猛烈に水が欲しくなった。
すると。
「Ｈｅｙ、アンジー！」
向こうから金髪の生徒が、生徒会長の方へ見て手を振ってきた。ウェーブのかかった髪型に快活な声音の、一目見てポジティブだと分かる人である。周囲には仲間と思われる女生徒が四人おり、共に歩み寄ってくる。
「『角谷杏』、だからアンジー？」
「馴れ馴れしい……」
「やあやあケイ！お招きどーもー」
会長の方は顔馴染みだったのか、ケイと呼んだ金髪の生徒に手を振り返す。
「何でも好きなもの食べてって！ＯＫ？」
「オーケーオーケー！おケイ、だけに」
「アハハッ!!ナイスジョーク!!」
やり取りを見ただけでも、かなりノリの良い人だということが分かる。自分の名前を駄洒落に使われても起こらないどころか、腹を抱えて笑っている。周りの苦笑いの女生徒たちとの温度差が激しい。
オルガ達が思わず半眼を作っていると、雰囲気を察してか、彼女の仲間内で最も背の

高い、銀髪のクールそうな雰囲気の生徒が話しかけてきた。
「すまないね。騒がしいだろう？うちの戦車隊長」
「へっ？ああいえ、そんな事は……」
思わず優花里が応対すると、向こうの生徒がどこかハッとした様子で優花里の顔をマジマジと見つめた。
「ん？……あんたもしかして、オッドボール三等軍曹？」
「……ハッ!?し、しまった！」
その名前を告げられると、優花里がハッとした様子で固まる。
実は戦車喫茶での一件があった数日後、優花里はこの一回戦のため、コンビニ船からサンダースに潜入していたのである。態々制服まで用意して臨んだこの任務で、大洗側はサンダースの使用戦車やモビルスーツなどの情報を知り得たものの、優花里も正体がバレて危うしという状況になってしまっていたのだ。
その際咄嗟に名乗った偽名が、ある戦争映画に登場するキャラクターの『オッドボール三等軍曹』という名前だったのだが……どうやらその名前と共に覚えられていたらしい。
「あの後、大丈夫だったかい？」
「へ？あ、はい……」

だが向こうは優花里に敵意を見せるどころか、優花里が無事な様子を見て、少し表情を緩めた。
「うちは毎日馬鹿みたいに賑やかだから、いつでも遊びに来なよ。……ああ、申し遅れたね。サンダース機動隊隊長の、アジー・グルミンだ。今日の試合、よろしく」
「あっ……よ、よろしくお願いしますぅっ！」
握手を求められ、上ずりながらも応じる。その様子を見ると、アジーと名乗った生徒は皆に手を振り、ケイ達の元へ戻っていった。
「良かった……」
「隊長は優しそうだね……」
「……クールだな」
「んぐっ……俺、今日あの人と戦うのか」
アジーが去った後、口々に感想を述べるあんこうチームの面々と三日月。
オルガがその様子を見ていると、ふと視界の端で、何やら忙しない様子でいる昭弘の姿を捉えた。いや、表面上はあまり変わってないように見えるが、長い付き合いであるオルガには、何やら誰かを探しているように見えた。
「昭弘。どうしたんだよ、さっきから落ち着きねえぞ？」
「っ、ああ、団長か……いや、ちょっとな」

オルガに一瞬驚くも、すぐに冷静に返す昭弘。だが、やはり様子がおかしい。
オルガが質問を続けようとした、その時。

「――――――あーきーひーろーっ！」

「……ん？」
昭弘の背後から、声がしたかと思うと。
「んぐっ!?」
「ぎゅーっ！」
昭弘の大きな背中に飛びかかるように、誰かが背後から昭弘を抱き締めた。咄嗟に反応できず、昭弘の口から一瞬苦しげな声が漏れる。
そして飛びかかってきた存在を確認すると、ほんのかすかに表情を緩めながら、冷や汗をかいて挨拶した。
「ら、ラフタか……直接会うのは久しぶりだな」
「ホントだよ！リモートでしか話せないから寂しかったー！てか昭弘、前より背中カッチリした？」
「……は？」

金髪のツインテールが特徴的な、快活そうな人である。制服から見るに、恐らくはサンダースの生徒だろう。そこまでは良い。

オルガが傍目から見てもとてつもなく間抜けな顔で突っ立っている最大の理由は、その女生徒が昭弘にいきなり抱きついてきたこと、昭弘と何やら親しそうなこと、そもそもいきなりすぎて頭が追いつかないこと、などである。

「まあ、鍛えてるからな。そういうお前こそ、前より背ぇ伸びたんじゃないか?」
「そうかなぁ～……って、そういえば昭弘、ホントに戦車道始めたんだね」
「あ、ああ……まあ、成り行きでな。モビルスーツで……」
「モビルスーツ乗ってるの!?てことは、今日昭弘と戦えるんだ!!」
「今日……ああそういや、前に大会で出るって言ってたか。言っとくが、こっちは初心者だからな?」
「分かってるって。でも、やるからには本気だからね。覚悟しなさいよ!」
「……ああ。お手柔らかに頼むぜ」

このようなやり取りの後、ラフタは手を振って、自分のチームの元へと戻っていった。しかしオルガは未だに呆然としており、口が半開きになっている。

「久しぶりに会っても、変わらないな、アイツは＿＿＿＿＿＿＿＿って、どうした団長。今までに見たことない面になってるが……あっ」

そんなオルガを見て、昭弘が一瞬呆けた様子で問いかける。が、すぐに自分の置かれた状況に気づくと、慌てた様子で「うぉっほんっ」、と咳払いをして、居住まいを正した。

「……すまねえ。見苦しいとこ見せちまったな」

「……いや、それは別にいいんだが……その、さっきまで話してた女子は、どういう……」

「ああ。さっきの奴……ラフタとは、俺が孤児院出て、養子として引き取られてからの馴染みでな。よく弟達の面倒も見てもらってたんだ。学園艦で暮らし始めてからは会える機会も減っちまったが、定期的に連絡し合っててな。今はまあ……大体お前の想像してる関係で間違いねえ」

「……そ、そうか」

直接言うのは気恥ずかしいのか、普段より硬い表情で言う昭弘。オルガはどう反応すべきかわからず、ほんの僅かに頬を赤らめて、視線を明後日の方向に向けて、ポリポリと頭を掻いた。

口下手で遠回しな言い方だが、要するにそういう事だろう。まさか大洗の戦車道メン

バーの中で誰よりも先に、競いようもなく最速で昭弘に、そういう関係の女子がいたとは。恋愛経験ゼロのオルガにとっては、縁遠い話だと思っていたため、心の中で密かに昭弘を尊敬する事にした。

これをシノやユージンが聞いてたら黙ってないだろうな――――と、オルガが呑気に考えていた、その時。

「――――はぁ～んなぁるほど。まぁさか昭弘にあんな別嬪な女がいたなんてなぁ？ユージン」

「昭弘……お前……お前……っ！」

そんなオルガの考えを神様が見通したように、昭弘の背後から物凄く見覚えのある人影が二つほど現れた。

間違いない、シノとユージンである。

「お、お前ら、いつから……」

「昭弘とあの可愛い女子が、そりゃあもう熱ぅーくハグしたとこからな！」

それはつまり、ほぼ最初から最後まで聞いてたという事だろう。

困惑している昭弘を他所に、明らかに楽しんで悪戯じみた邪悪な笑みを浮かべるシノ

と、心底羨ましく、切実そうな顔をしたユージンが囃し立てる。
「んだよ昭弘！あんなきれーな女いたなら一言言ってくれたっていーじゃんかよ！お前も隅に置けねーなぁ！」
「お、俺は別に羨ましくなんてねーからなぁっ!!俺だってなぁ！俺だってなぁ！」
「お、おい落ち着けお前ら！」
先ほどから引き続き、困った様子の昭弘だったが、シノとユージンの攻勢はしばらく止まる様子がなかった。
「ったくお前ら……」
「……何があったの？」
思わず同情的な視線で昭弘の修羅場を眺めるオルガ。隣には、新しくチュロスを持った三日月が、首を傾げてやって来ていた。

◆

一方その頃、その修羅場を作った原因である、ラフタ・フランクランド本人はというと。
「（あああああああーーっ!!ヤバイヤバイヤバイ！久しぶりに会ったから思わず抱きつい

ちゃったけど、今思い返したらとんでもないことしちゃったよね私いっ!?い、いや待って。私はそもそも昭弘の幼馴染だし、ていうか彼女だし、親も公認してるし、特に問題はないはず。ていうかウチの学校の校風的にも、大丈夫なはず。うん、問題はない。全く問題無い。あれ?でも待って。確か隣に同じジャケット着た人いたよね?あれ多分昭弘の友達だよね?そうでなくても同じチームのメンバーだよね!?あああああッ!!どうしようどうしようどうしよう!私のせいで、昭弘がその人から弄られたりしたらどうしよう!?ていうかそれ以上に……うあああああ!!恥ずい!超恥ずい!!超超超恥ずかしいーっ!!でも昭弘の背中、前会った時よりガッチリしてて、大きくて……フへへへへ、じゃなくて!!あーんもぉーッ!!)」

「……何やってんの?ラフタ」

ハンバーガーのワゴン車の陰で、ケチャップのように顔を赤くしながら、しゃがんで顔を覆って悶えていた。その様子を見に来たアジーが泣き付かれ、慰めるのに一定の労力を割いたのは、また別の話である。

◆

『それでは、サンダース大学付属高校と、大洗学園の試合を開始する!』

そんな一幕もあった交流も終わり、いよいよ大洗学園こと大洗鉄華団と、サンダース大学付属高校との試合の時がやってきた。

会場に集まった観客も、試合の開始を今か今かと待ちわびている。

「よろしく」

「ああ」

前に出てきたケイと杏が、試合前の握手を交わす。

各校とも機体が出揃い、それぞれの陣地で待機していた。大洗は戦車が五両に、モビルワーカーが二両。そしてモビルスーツが二機という編成。

対するサンダースはモビルワーカーがない代わりに、戦車、モビルスーツ共に最大投入可能数である十両と三機を投入してきていた。サンダースの戦車は多少の装備の違いがあれど、殆どがアメリカ製の戦車である【シャーマン】による編隊を成している。

そしてモビルスーツはと言うと、一機は最も戦車道で導入されている名機グレイズだが、他二機は異なっていた。

アメリカンなサンダースの校風とは少し異なる、まるで日本の鎧武者のような、鈍色に光る装甲に身を包み、四つ目の頭部と背面の大型ブースターが特徴的な機体。

ＳＴＨ―０５Ｒ　漏影

サンダースのスポンサーであるテイワズから提供されている、優秀な高機動モビル

スーツであった。

「――――説明した通り、相手のフラッグ車を戦闘不能にした方が勝ちです。サンダース付属の戦車は、攻守ともに私たちより上ですが、落ち着いて戦いましょう」

そんな中大洗は、戦車の内部で最後のブリーフィングを行なっていた。

「機動性を生かして常に動き続け、敵を分散させて、Ⅲ突の前に引きずり込んでください」

『敵のモビルスーツは、ミカと昭弘が相手をする。数は向こうの方が上だが、勝てない相手じゃねえ。だがそれも絶対とは言い切れねえ。モビルスーツの攻撃に当たろうものなら、一発で白旗だ。皆気をつけろよ。……これが俺たち、大洗鉄華団の初陣だ！気ぃ引き締めて行くぞオッ!!』

『はいッ!!』『応ッ!!』

オルガの激励に、全員が力強く応える。

『試合、開始！』

そして今まさに、戦いの火蓋が切って下されたのであった。